The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	“Daryā - é - Latāfat” に記録された諺について
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	印度民俗研究. 1977, 4, p. 17-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

"Daryā-é-Laṭāfat"に記録された諺について

古賀　勝郎

Mīr Inshā allāh Khān Inshā (C.1757－1817)がその著"Daryā -é- Laṭāfat"(D.L.)[1]によって詩人としての名ばかりでなくウルドゥー語史。ウルドゥー文法の分野で今日なお記憶されていることは周知の通りである.

全九章のうち第一章から第七章までがInshāの筆になるもので,第八～九章はMirzā Muḥammad Aḥsan Qatīlの執筆になる.第七章までのうちウルドゥー語史やウルドゥー文法を記述した個所は本来最も重要な部分であるのは勿論であるが,言語生活の複雑な諸相を注意深く観察し的確に把握した結果を記述した個所(二～三章)は甚だ興味深く研究資料としても勝れており,貴重な記録となっている.

第三章の第一節は主としてデリーで用いられている慣用語句や諺を取り上げ解説を加えている.そこには,いわゆるMuḥ(āwarah),Roz(marrah),M(aṣal)等が雑然と列挙されている.したがって,筆者がそれらの一つ一つについてどれをMuḥ.にどれをRoz.にどれをM.に入れたかの明示がない.M.の中にも秀句の類のものも少なからず見られ,また,俗語。隠語。挨拶。呼び声。掛声等の類のものもかなり見出される.[2]

小論ではそれらのうちMaṣal(いわゆる諺)の類を抜き出して,それらの分布と意味の歴史的。地理的展開を検討する.

検討にあたっては次のような方法を採った.すなわち,D.L.においてMaṣalとしての用法に該当するものを網羅し,それぞれについてFallon,S.W.の『ヒンドスターニー諺辞典』(H.K.)[3] Firūzの『ウルドゥー語大辞典』(F.L.)[4]『(ビハール)諺辞典』(K.K.)[5]『パンジャーブ語諺辞典』(P.A.)[6]の中から形態的に対応する諺を取り出した H.K.は,ウルドゥーの諺に関する本格的な辞典であり,D.L.成立後80年を経ずして編まれている点で重要な参考資料である.F.L.(Firūz辞典)は本格的なウルドゥー語大辞典であるばかりでなく,それに収載されているイディオムや諺の数からも類書から抜き出ている.K.K.は近年におけるインド諸語の諺研究の中でビハールという広大な地域において科学的。統一的な調査方法によって得られた画期的な成果とみなされるものである.また,いわゆるヒンディー語地域の境界で位置しているビハールに行なわれている諺という意味で地域的な分布及び意味の展開を調べるのに最適なものの一つと考えられる.地域文化圏の設定や標準語の普及,あるいは,公用語。国語問題の所在などについて考察する上で参考になる.また,諺そのものの形態及び意味の範囲を明確にすることができよう.地理的に近い上,ヒンディー及びウルドゥーの共通基盤の形成にもあずかっていると考えられるパンジャービーの諺辞典としてP.A.は科学的。体系的な蒐集及び解説による最新の成果と認められるものである.なお,これを補足するものとしては,『ボージプリー諺辞典』(B.L.)[7]『ヒンディー慣用句辞典』(H.M.K.)[8]『(ウルドゥー)諺物語』(Q.A.)[9]及び『ヒンディー諺辞典』(H.L.K.)[10]を用いた.

諺の用法は生活基盤の変化につれて本来のものから転じたり，特殊な用例や例外的な用法が一般的なものに移向したりする．そうしたことから語句までもが別種のものに入れかわったりすることがある．また，異系統の諸言語の間に同種の諺が見出される．しかし，ヒンドスターニー（ヒンディーとウルドゥーと共通することがあるという意味で使用）とビハーリーや，パンジャービーとの間のような関係の言語にあっては，同種の表現による諺が共有されているか否かが先に述べたような視点から重要な意味を持つ．

また，類似の表現のものにあっても意味を共有しているか否か，という点も重要であり注意すべきである．ラージャスターンの諺（R. K.）[11] も含め次に二，三の諺を例示しよう．

(1)

Kutte kī dum bārah bāras nalwe mẽ rakho, tau bhī ṭeṛhī kī ṭeṛhī (H. K.)

［直訳］ 犬の尻尾は１２年間筒に入れておいてもやはり曲がったまま

［意味］ 悪人はいつまでも悪人のまま．教育や感化では改まらぬもの

Kutte kī pũch bārā baras dabī rahī paṇ jad niklī jad hī ṭeṛhī (R. K.)

［直訳］ 犬の尻尾を１２年間おさえてあったが，出した時には曲がっていた

［意味］ 性分はかえられぬもの

Kukur ke põch mẽ kaṭanõ tel lagāib ṭeṛh ke teṛhe rahī (K. K.)

［直訳］ 犬の尻尾にどれほど油を塗っても曲がったまま

［意味］ 悪人をどれほど正道につかせようとしても無駄なこと．性分はどうしようもない

(2)

Phūhaṛ kare singār, mãg ĩṭõ se phoṛe (H. K.)

［直訳］ だらしない女は化粧の際，（髪の）わけぎわを煉瓦で割る

［意味］ （未亡人でない仕合せのしるしに髪のわけぎわに塗る）朱のかわりに煉瓦をすりつけるので血が出てくる

Phūṛ karai siṇgār mãg ĩṭã sũ phorai (R. K.)

［直訳］ H. K. に同じ

［意味］ だらしない女は化粧すればわけぎわを煉瓦で割ってしまう

Phuharī kare singār surukhī ke senur lagāy (K. K.)

［直訳］ だらしない女は化粧するのに朱のかわりに（れんがを砕いた）粉（スルキー）を塗る

［意味］ だらしない女（や男）のだらしなさを嘲るのにいう

(3)

Aye cait suhāwan, phūhaṛ mail chuṛāwan (H. K.)

［直訳］ さわやかなチャイトの月（インド暦の１月，陽暦の３月半から４月半）がやってくればだらしない女たちが（冬中の）垢をおとすことだろう

［意味］ 寒い間は沐浴せず，暑くなってから汗で垢のおちるようなだらしない不潔な女のこと．あるいは暑くなってからしか沐浴しない女のこと．（普通には，たまにしか沐浴せぬ不潔な人についていう）

Ayo cait niwāyo, phūṛã mail gãwāyo (R. K.)

［直訳］ 暖かいチャイトの月がやってきた．だらしない女たちが垢をおとした

［意味］ だらしない女が沐浴するようになれば，暖かい季節になった，と思え

Ail cait suhāwan, phūhar mail chorāwan (K. K., B. L.)

［直訳］ 暖かいチャイトの月がやってきた．だらしない女たちが垢をおとすことだろう（K. K.）

〔意味〕 チャイトがやってきたのでだらしない者も垢をおとし家をきれいにするだろう（B. L.）

これらの例に見られるように表現上はほとんど同一のものにあっても意味の重点はそれぞれの言語で微妙に異なったり，同一言語内においても複数の意味に用いられることが少なからずある．HH. K. が女性とかムスリムとか，諺の管理者をも併記している点もやはり重要である．

このような観点から O. L. を媒体にして次に検討を加えた．[12]

次の表は D. L.，H. K.，F. L.，K. K.，P. A. の関係を D. L. を基準にして示したものである．これによって D. L. とヒンディー (H)，ウルドゥー (U) との関係，及び，H. U. とビハーリー及びパンジャービーとの関係を単に言語面ばかりでなく言語文化面からもいささかなりとも明らかにすることができよう．

K. K. 及び P. A. については音韻・文法・語彙・表現法の各面において D. L.，H. K.，F. L. の三形とは隔たりが大きいのは当然であるが，それにもかかわらず H. U. の近縁語・近接語としての共通点を見逃すことはできない．共通点と同時に相違点も興味深いものである．そこで，K. K. 及び P. A. については H. U. 形に類似の表現形のものの有無及び類似形のあるものについてはその意味の H. U. 諸形との類似・異同について調べることにした．D. L.，H. K. 及び F. L. についてはさらに詳しい検討を加えた．

表は D. L. 形を記し，それと他の関係を形態及び意味の両面から明らかにする

表現・形態面では

❀ 語句の順序，文法上，音韻上などに多少の差違の認められるもの

△ D. L. 形に比して語句の一部が省略されているもの

◇ 同じく一部が多いもの

□ 語句の一部に D. L. 形に見られないものが使用されているもの

意味面は

◎に数字の付していない場合は同じ意味に用いられていることを示す

◎に数字の付してある場合は，その数だけ異った意味のあることを示す

☆ イディオムとしての用法に限られるもの

次に下表について総括的な数字を示す

1．表現・形態面

D. L. に対応するものがみられないもの

H. K. 4　F. L. 18　K. K. 48　P. A. 45

D. L. と全く同一のもの

H. K. 30　F. L. 34

D. L. と❀の関係にあるもの　H. K. 20　F. L. 13

D. L. と□の関係にあるもの　H. K. 20　F. L. 10

D. L. と△もしくは◇の関係にあるもの

H. K. 11（△5，◇6）　F. L. 5（△2，◇3）

☆の用法に限られるもの

H. K. 1　F. L. 5

2．意味面

(a) D. L.　H. K.　F. L.　K. K.　P. A. が同一のもの　6

D. L.　H. K.　F. L.　K. K.　〃　11

D. L.　H. K.　F. L.　P. A.　〃　3

H. K.	F. L.	K. K.	P. A.	が同一のもの	2
D. L.	H. K.	F. L.		〃	14
D. L.	H. K.	P. A.		〃	1
D. L.	F. L.	P. A.		〃	1
H. K.	K. K.	P. A.		〃	1
F. L.	K. K.	P. A.		〃	1
H. K.	F. L.	K. K.		〃	5
H. K.	F. L.	P. A.		〃	1
H. K.	F. L.			〃	11
H. K.	K. K.			〃	7
H. K.	P. A.			〃	5
F. L.	K. K.			〃	4
D. L.	F. L.			〃	11
F. L.	P. A.			〃	3

D. L.

1. Ant bhale kā bhalā ant bure kā burā
2. Andhe kī jorū kā allāh belī
3. Andherī nagarī caupaṭ rāj
4. Andhõ mẽ kānā rājā
5. Apnī galī mẽ kuttā bhī sher hai
6. Ākh ojhal pahāṛ
7. Ākhõ ke andhe nām nainsukh
8. Āg lagte jhõprā jo nikle so lāo
9. Aṭhõ gāṭh kummait
10. Adhī murghī ādhi baṭer
11. Āp bābū mangate bāhar khaṛe darvesh
12. Is se kyā ḥāsil ki shāhjahān kī dāṛhī baṛī thī yā ʿālamgīr kī
13. Ūcī dukān phīkā pakwān
14. Ūt pahār ke nīce ātā hai to āp ko samajhtā hai
15. Kaī din tumne bhī cām ke dām calāye
16. Kakṛī ke cor ko gardan nahī mārte
17. Karelā aur nīm caṛhā
18. "Qāzī jī tum kyõ duble ho ?" "Shahar ke andeshe se"
19. Kānā ṭaṭṭū buddhū nafar
20. Kāne coṭ kanaude bhet(bhet)
21. Kulhiyā mẽ guṛ pʼoṛ rahā hai
22. Koṛh mẽ khāj
23. Kyā darzī kā kūc kyā muqām
24. Kyā nangī nahāegī kyā nicoṛegī?
25. Kharī mazdūrī cokhā kām

	D. L. K. K.	が同一のもの	1
	K. K. P. A.	〃	2
	D. L. H. K.	〃	10
	D. L. P. A.	〃	4
(b)	D. L. にしか見られぬもの	(85中)	36
	H. K. 〃	(81中)	24
	F. L. 〃	(67中)	24
	K. K. 〃	(38✳中)	8
	P. A. 〃	(40中)	9

✳この中の1はH. K. の引用

	D. L.	H. K.	F. L.	K. K.	P. A.
1.	○ ◎1	△1△2✳1◎1	✿1◎2	◎1	◎2
2.	○ ◎	—	○ ◎	—	◎
3.	○ ◎	□1◇ ◎	□2◇1◎	◎	◎
4.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	◎	◎
5.	○ ◎1	✿1◎2	✿2◎2	◎2	◎2
6.	○ ◎1	◇1◎2	◇1◎3	—	◎2
7.	○ ◎1	○ ◎1	○ ◎1◎2	◎1	◎3
8.	○ ◎1	✿1◎2	✿2◎2	◎2	—
9.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎2	—	—
10.	○ ◎1	✿1□1◎2◎3	□1○2◎4	□1◎5	◎6
11.	○ ◎1	✿1◎1	—	◎2	◎1
12.	○ ◎	□1◎	—	—	—
13.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	◎	◎
14.	○ ◎1	□1◎1	□2◎2	◎2	—
15.	○ ◎	☆	☆	—	—
16.	○ ◎	✿1◎	○ ◎	◎	—
17.	○ ◎1	◇1◎2	○ ◎3	◎2	◎4
18.	○ ◎1	✿1◎2	✿1◎2	◎1	◎2
19.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎2	—	—
20.	○ ◎	□1◎	—	—	—
21.	○ ◎1	✿1◎2	✿2◎2◎3	—	—
22.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	—	—
23.	○ ◎1	□1◎2	○ ◎1◎3	—	—
24.	○ ◎	○ ◎	○ ✿ ◎	—	◎
25.	○ ◎1	✿1◎2	○ ◎3	◎2	◎1

26. Khānā pīnā gā̃ṭh kā, nirī salām ʻalaik
27. Khel na jāne murghī kā uṛāne lāgā bāz
28. Gadhā kyā jāne zaʻfrān kī qadr
29. Gharīb kī jorū sab kī bhābī
30. Guṛ khānā gulgulo̅ se parhez
31. Ghaṛī me ghaṛiyāl hai
32. Ghar kā bhedī lankā ḍhāe
33. Ghar kī puṭkī bāsī sāg
34. Ghar kī murghi dāl barābar
35. Gā̃d ko gahan lag gayā
36. Corī kā guṛ mīṭhā
37. Choṭā mu̅h baṛī bāt
38. Jangal me̅ mor nācā to kisne(kinne) dekhā
39. Jo garajte hai̅ so baraste nahī̅
40. Jogī kāke mīt
41. Jo bole so ghī ko jāe
42. Ḍīl dar gumbad āwāz dar phish
43. Dhaltī phirtī chā̃wa̅ kabhī idhar kabhī udhar
44. Ṭabele kī balā bandar ke sar
45. Tinke ki oṭ pahār
46. Tumhāre laṛke bhī kabhī ghuṭno ke bal cale̅ge
47. Daryā me̅ rahnā aur magarmacch se bair
48. Dā̃t par mail nahī̅
49. Dāl ke sar phūl pān
50. Dekhā bhālā topcī, caprā saiyad ho
51. Do mullā me murghī murdār
52. Dhī̅g dhī̅g ballū kā rāj
53. Dhobī kā kuttā ghar kā na ghāṭ kā
54. Nangi bhalī ki bil me̅ bā̃s
55. Nāc na jāne ā̃gan teṛhā
56. Naukar lāḍ kapūr ke hō̅ṭh male̅ haq lē
57. Panj ʻaib sharī mādar pidar bezār
58. Paṛh patthar likh lahṛā bhae̅ī̅te̅ bā̃dh kacahrī gaē
59. Paṛhe na likhe nām muhammad fāzil
60. Pā̃co̅ ugliyā̃ ghī me̅ tar hai̅
61. Fajr kā bhūlā shām ko ghar āwe to use bhūlā nahī̅ kahte
62. Baglā māre pankh hāth
63. Bachṛā khu̅ṭe ke bal kūde
64. Baṛe bol kā sar nīcā
65. Baṛe miyā̃ so baṛe miyā̃ choṭe miyā̃ subhān allāh
66. Barsegā barsāwegā damṛī ser lagāwegā

26.	○ ◎1	○ ◎2	—	—	—
27.	○ ◎	✿1◎	—	—	—
28.	○ ◎1	△ ◎2	○ ◎1	—	◎2
29.	○ ◎1	✿1◎1	○ ◎1	◎2	◎2
30.	○ ◎1	✿1◎2	○ ◎3	◎3	◎3
31.	○ ◎1	○ ◎1	○ ◎1◎2	—	—
32.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	◎	◎
33.	○ ◎	○ ◎	✿1◎	—	—
34.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	◎	◎
35.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎1◎2◎3◎4	—	—
36.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎1	—	◎1
37.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎1	◎2	◎1
38.	○ ◎1	✿1◎1	○ ◎1◎2	—	—
39.	○ ◎	✿1◎	✿1◎	◎	—
40.	○ ◎1	✿1◎2	✿1◎1	◎2	◎3
41.	○ ◎1	○ ◎2◎3	□1◎3	◎3	—
42.	○ ◎	□1◎	—	—	—
43.	○ ◎	△1◎	✿1◎	—	—
44.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎2◎3	—	◎3
45.	○ ◎1	○ ◎2◎3	○ ◎3◎4	—	—
46.	○ ◎1	□1◎1◎2	—	—	—
47.	○ ◎1	○ ◎2	○ ◎3	◎2	◎3
48.	○ ◎1	○ ◎1	☆ ◎1◎2	—	—
49.	○ ◎1	□1◎2	□2◎1	—	—
50.	○ ◎1	◇1◎2	—	—	—
51.	○ ◎1	□1◎2	□2◎1	—	◎3
52.	○ ◎	□1◎	—	—	—
53.	○ ◎1	○ ◎4	◇1◎1◎4	◎4	◎1
54.	○ ◎1	□1◎2	—	—	◎2
55.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	◎	◎
56.	○ ◎1	□1◎2	—	—	—
57.	○ ◎1	△1◎2	☆ ◎3	—	◎4
58.	○ ◎1	—	—	◎1	◎2
59.	○ ◎1	✿1□1	○ ◎3	◎4	◎4
60.	○ ◎1	◇1◎1	✿1◎1◎2◎3	—	◎1
61.	○ ◎	✿1◎	✿2◎	—	◎
62.	○ ◎1	○ ◎1	△1◎2	◎3	—
63.	○ ◎1	✿1◎2	✿1◎3	◎4	—
64.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	—	—
65.	○ ◎1	□1◎2	○ ◎2	◎3	—
66.	○ ◎1	□1◎1◎2	—	—	—

67. Bal be jummā terī dhaj

68. Bāp na māre pidarī beṭā tīrandāz

69. Bārah bāṭ aṭhārah paĩḍe phirā hai

70. Bāsī rahe nā kuttā khāe

71. Būr ke laḍḍū khāegā so pactāegā aur na khāegā so pactāegā

72. Bhus mẽ cingī ḍāl jamā lo dūr kharī

73. Man bhāe muṛiyā hilāe

74. Mũh lagāī ḍornī gāwe tāl batāl

75. Mũh se to phūṭe

76. Yah mũh aur masūr kī dāl

77. Rānī ko rānā pyārā kānī ko kānā pyārā

78. Lakṛī ke bal bandarī nāce

79. Lahū lagāke shahīdõ mẽ mil gayī

80. Shaikh kyā jāne sābun kā bhāw

81. Sab mile par langoṭiyā na mile

82. Siyānā kauwā gū khātā hai

83. Sau sunār kī ek lohār kī

84. Ḥātim kī gor par lāt mārtā hai

85. Ḥimāyat kī gadhī 'irāqī ko lāt māre

上の表によって示される数字について考えてみよう．D. L.，H. K.，F. L.，相互間の密接な関係は当然予想されるところであるが，注目すべきは表現。形態及び意味の両面にわたってこれら三形の間にも無視できぬ差異の存在することである．（対応形の有無そのものは資料面での制約により止むを得ないのでここでは問題にしない．）その理由としては，歴史的な推移（12，51，56）のほかに，地域的な分布，方言の影響（8）HとU との語彙の系統の相違をはじめとする文化的要素の差違（11，16，29，59，61）などが考えられよう．広大な地域に行なわれ，歴史的。文化的に多様な構成を有する地域に共通語的機能を果たしてきた言語だけに当然ともいえよう．地域的香気を未だ残したものが存してきたことについては特別の説明を必要としないだろう[13]．留意すべきは，ヒンディー語圏（地域）の拡大に伴なってこのような状況は今日も継続していることである．

たとえば，angṛāī toṛnā というイディオムの用法についてもその意味については多様な解訳があり，また実際に使用されている．さらには ciṛiyā という頻用される語彙についてさえ各辞書の記述するところは一致していないし，実際多様に用いられている．また，ウルドゥー語使用圏の中においてさえ“ek nūr zabūr hazār nūr kapṛā”（'Good clothes open all the doors' に近い意）のような諺で分布地の地域的差異を示すものがあるのである．このことについてはHやUの標準化が遅れているというような判断もなされようが，歴史的な背景についても考慮しなければなるまい．そしてこれらはHやUの標準化の過程においてそれぞれを豊かにまた正確にする方向で検討され解決されるべき課題である．

(註)

1 “Daryā — ē — Laṭāfat”, ed, by 'Abd —ul— Ḥaq ; translated by Paṇḍit Brajmohan Dattātreya Kaifī Dihlavī, 3rd edition, Aurangābād, 1935

2 たとえば，次のような例がみられる．

67.	○ ◎1	○ ◎2	—	—	—
68.	○ ◎1	✿1◎2	✿2◎3◎4	◎3	◎2
69.	○ ◎1	△1◎2	—	—	—
70.	○ ◎1	□1◎2◎3	□1◎2	◎4	—
71.	○ ◎1	◇1◎2	◇2◎3	—	◎4
72.	○ ◎	○ ◎	○ ◎	—	—
73.	○ ◎1	□1◎1	○ ◎1	◎2	—
74.	○ ◎1	□1◎2	□1□2◎3	—	◎3
75.	○ ◎	□1◎	□1◎	—	—
76.	○ ◎1	○ □1◎2	○ ◎1	◎2	◎2
77.	○ ◎1	○ ◎2◎3	○ ◎3	◎3	◎4
78.	○ ◎1	○ ◎2	—	—	—
79.	○ ◎1	✿1◎2	☆ ◎2	—	—
80.	○ ◎1	○ ◎2	—	—	—
81.	○ ◎	—	—	—	—
82.	○ ◎1	□1◎2	○ ◎3	—	◎2
83.	○ ◎1	—	△1◎2	◎2	◎2
84.	○ ◎1	✿1◎2	☆ ◎2◎3	—	—
85.	○ ◎	□1◎	□2◎	—	—

＊1　前半，後半それぞれ独自　　＊2　前半のみ

maṭṭī kī ūrat ⟪ bewuqūf ādmī ⟫(P. 133), māmūn jī johār ⟪ ta'ne yā hansī ke liye salām 'alaikum ke badle istemāl karte haĩ ⟫(P. 137), khairi khairi dẽge koī aise hī dātā dẽge ⟪ yah sadā zalīl m ngatõ kī jo wah qafīlõ ke sāmne lagāte haĩ ⟫(P. 133), bhojlā ahār ke patthar khāo ⟪ yahã̃ khāne kī koī cīz nahĩ ⟫(P. 150), kale wāle lāl ⟪ kunwe se pānī khīnchte huwe māliyõ kī āwāz ⟫(P. 132), bāj bāj Allāh muhammad kā rāj ⟪ nafar log ghaṛiyāl bajāte waqt yah alfāz bolte haĩ ⟫(P. 133)

3　S. W. Fallon Dictionary of Hindustani Proverbs (1886); Krishnanand Gupta(ed.), Hindustani Kahavat Kosh, New Delhi, 1968

4　Maulavī Fīrūz — ud — dīn, Fīrūz — ul — Lughat — Urdū Jāma', new edition, Lāhaur, 1967

5　Bhuvaneshvarnath Mishra 'Madhav', Vikramāditya Mishra(compl.), Kahāvat Kosh, Paṭnā, 1965

6　Mahitāb Singh(compl.), Surindar Singh Kohlī & Bacan Singh Sundarā(ed.), Panjābī Akhāṇ Kosh, Punjab University, Candīgaṛh

7　Shashishekhar Tiwārī, Bhojpurī Lokoktiyã̃, Paṭnā 1st ed., 1970

8　Bholānāth Tiwārī(ed.), Hindī Muhāvarā Koṣ, Ilāhābād, 1951

9　Muḥammad Baqir Ḥasan Qādirī, Qisas 'ul Amṡāl, Dihlī, no date

10　Vishvambhar Nāth Khatrī(compl.), Hindī Lokokti Kosh, Calcutta, Vi. 1980

11　K. L. Sahal, Rājasthāni Kahāwatẽ — Ek Adhyayan, Dillī, 1958

12　P. A. 及び K. K. の成立が最近のものであるのに対し，他がいずれも９０年以上の古い時

期に編まれたものであるので，口誦文芸として当然のことながら歴史的な変遷により他に見られながらP. A. 及びK. K. には見られない諺があることも想定すべきであろう．

13 拙論「ガウリーダッタの語彙」（特に註7を参照）〔印度学仏教学研究 Vol XXIII No. 1 1974〕

次の説明のうちD. L. とF. L. の直訳及び末尾の註が筆者のもので，他の直訳及び意味は原著者。原註者の解釈による．末尾以外の註は原註による．『 』内に適宜邦語の諺を参照して説明を補った．〔訳〕と〔意〕はそれぞれ〔直訳〕及び〔意味〕の略号である．

（1）

D. L. Ant bhale kā bhalā, ant bure kā burā

〔訳〕 善の果は善，悪の果は悪．

〔意〕 同上．

『情は人のためならず』及び『人を呪えば穴二つ』

H. K. Ant bure kā burā

〔訳〕 悪の果は悪．

〔意〕 悪事を働けば悪い結果を享けるもの．

Ant bhale kā bhalā

〔訳〕 善の果は善．

〔意〕 善行をすれば善果を享けるもの．

F. L. Ant bure kā burā, ant bhale kā bhalā

〔意〕 悪の果は悪，善の果は善．

K. K. Ant bhale kā bhalā (Campāran — 1)

〔訳〕 善の果は善．

〔意〕 善を行えば最後に自ら仕合せに到るもの，もしくは，善の果は善なるもの．

P. A. Ant bhale dā bhalā

〔訳〕 良いことの終わりはよい．

〔意〕 諸々の困難にもかかわらず良いことは達成される．

註 1 H. K. では上のように前半と後半とが別個に用いられたものしか見られない．

2 K. K. にはD. K. の後半の句は見られない．

（2）

D. L. Andhe kī jorū kā allāh belī

〔訳〕 盲人（愚者）の妻を守るのは神（アッラー）．

〔意〕 愚か者はだれからも財をかすめとられる．

H. K. K. K. ともに同じ表現のものは見られない．

F. L. D. L. と同じ．

〔意〕 自分の所有物をしっかり守れぬ時にこの諺を用いる．

P. A. Andhe dī jorū, rabb rakhwālā

〔訳〕 盲人（愚者）の妻（を）守るのは神

〔意〕 自分の所有物を管理できない人についていう．

註 1 H. K. に次の諺が見られる．

Andhe kā khudā hāfiẓ

〔訳〕　愚者（盲人）を守るのは神（のみ）.

これは意味は勿論，表現までD. L. に近似している.

註2　B. L. には次の諺がある

Buṛbak kə məhrārū sabh kə bhaujāī

〔訳〕 愚者の妻はみなの兄嫁

〔意〕 夫が愚かであればみなからなれなれしくされること.

これは夫が愚者となっている点は同一であるが，それ以外は（２９）と同趣であり，意味の上からも（２９）に入れるのが妥当である.

註3　またK. K. には次のような諺が見られる.

Andharā ghar mẽ bhaĩs biyānī ṭəhrī lə kə dauṛa ho（Paṭnā 1）

〔訳〕 めくらの飼っている水牛の乳が出るようになれば他人が牛乳入れを持って急ぎやってくる.

〔意〕 愚か者や弱い者はみなに食いものにされる.

（３）

D. L.　Andherī nagarī caupaṭ rāj

〔訳〕 暗黒の街，荒廃せる国.

〔意〕 役人や為政者の横暴についていう.

H. K.　Andhər nagarī abūjh rājā ; ṭakə sər kakṛī ṭakə sər khājā

〔訳〕 無法の街。愚昧な王．カクリー（きゅうりの類）もカージャー（砂糖やバターを用いた上等の菓子）も同じく１セール（９百グラム強）が１タカー（値段）.

〔意〕 全くの無法。無秩序についていう.

F. L.　Andhər nagarī caupaṭ rājā ṭakə sər bhājī ṭakə sər khājā

〔意〕 無法な役人，暴政，無政府状態，為政者の怠慢により掠奪。混乱の生じているところ.

K. K.　Andhər nagarī caupaṭ rājā (Sāran－1)

〔訳〕 街に無法は王愚昧なればこそ.

〔意〕 H. K. に同じ.

〔原註〕 この諺はある物語に基いたものであり，それを題材にしてBhāratendu Harish candraが‘Andher Nagarī’という喜劇を書き，当時大評判となった．この諺はビハールの各地で聞かれるものである．ラージャスターニーではこれは次のようになる.

Ãdhər nagarī, anbūjh rājā

ṭakai sər bhājī ṭakai sər khājā

上に揚げたものは中途までのもので，本来次のように２行のものであるが，簡潔にいうためしばしば第１行のみ用いられる.

Ãdhər nagarī caupaṭ rājā

ṭakə sər bhājī ṭakə sər khājā

P. A.　ndh nagrī, bə－dād rājā（andhā rājā tə bə－dād nagrī）

〔訳〕 暗黒の街，無法の王（愚昧な王に無法の街）

〔意〕 民が無法の為政者に苦しめられている時に用いられる.

註1　H. K. にはF. L. と同じものが挙げられている.

上記の異形を比べてみるとD. L. の‘caupaṭ rāj’は意味上はcaupaṭとrājとが自然な形で結合している．H. K. の場合のようにrājでなくてrājāであればabūjhもしくはanbūjhのほうが無理

なく結びつく．ただし，2行が脚韻をふんでいることを考えれば，rājā が khājā との関係で選ばれよう．

註2　Q. A. には，次の二形が見られる．すなわち，'Andhā rājā caupaṭ nagarī'，'Andhī nagarī caupaṭ rāj' 意味としては，①王が無法をはたらいたり，愚昧であれば国はすぐに亡びる．②為政者が臣民の暮らし向きを知らなかったりひどい不法を行なったり，正邪の区別をなさなかったりする時に評する，と説明されている．

（4）

D. L.　Andhõ mẽ kānā rājā

〔訳〕　盲人の中では片目は王様．

〔意〕　わずかばかりの学問があるだけで無学な者の中で威張っている者を評していう．同様に弱点が自分よりも多い人の中にいる者についてもいう．

『鳥なき里のこうもり』

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕　愚者の中ではわずかばかり学んだ者が学者とされる．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕　H. K. に同じ．

K. K.　Ãdharā mẽ kān rājā (Paṭna — 1)

〔意〕　①愚者の中では少し知恵のある者が敬まわれるのや②少し知恵のある者が愚者の集りで得意気にふるまうのを評して言う．

P. A.　Annhiã vicc kāṇā rājā

〔訳〕　D. L. に同じ．

〔意〕　K. K. の②に同じ．

註1　K. K. はヒンドスターニーではなくビハーリー語形を示している．

（5）

D. L.　Apnī galī mẽ kuttā bhī sher hai

〔訳〕　自分のすんでいる路地では犬も虎のように（強く）なる．

〔意〕　他人の庇護を得てつけあがる人のことをいう．

『虎の威を借る狐』

H. K.　Apnī galī mẽ kuttā sher

〔意〕　人みなわが家では大きなことをいうものだ．「内弁慶」

F. L.　Apnī galī mẽ kuttā bhī sher hōtā hai

〔意〕　無力な者もわが家では元気が出るものだ．

K. K.　① Apanā duāre kukro bāgh（ shāhābād — 1 ）

② Apanā duār par kukro sher（ Shāhabād — 2 ）

③ Apanā khũṭā par kukro balī（ Muzaffarpur — 2 ）

〔訳〕　①②わが家の戸口では犬は虎（のよう）

③わが家の杭につながれている時の犬は（虎のように）強い

〔意〕　家の中では高言するが，家の外に出ればすっかり意気地がなくなること．「内弁慶」

P. A.　Āpṇī galī vicc kutta bhī sher hundā hai

〔訳〕　D. L. に同じ．

〔意〕　人はみな内では強がったり威張ったりするものだ．

註1　ほぼ同じ語句を用いた表現でありながら，意味上の重点の置き方はD. L. とH. K.，F. L.，K. K. とでは異なっている．すなわち，前者では庇護。後楯に重点があるのに対し，後者では「内」に重点がある．

（6）

D. L.　Ākh ojhal pahāṛ

“tinke kī oṭ pahāṛ（45）に同じ．

H. K.　Ākh ojhal pahāṛ ojhal

〔訳〕　目に入らざれば山も見えず．

〔意〕　人は目の前にいる間しか気にかけてくれぬもの．

『去るものは日日に疎し』

F. L.　H. K. に同じ．

〔訳〕　目に入らねば山のかげ（にあるに等しい）．

〔意〕　目の前になければ側にあろうとも離れたところにあるのと同じ．

K. K.　なし

P. A.　Akkhõ uhle, pahāṛ uhle (Akkhõ uhle, paī bhaṛole)

〔訳〕　目をおおわれれば山におおわれたも同然（目をおおわれれば穀物入れに入ったも同然）．

〔意〕　知人と合わぬこと．

註1　H. K. とF. L. とは同一ではないが近い関係にある．しかし，D. L. はいずれとも全く異なる事象を述べたものである．

註2　D. L. は（45）と表現上は近いが，H. K. 及びF. L. の末尾に見られるojhalを持たない．

註3　K. K. にはH. K. にほぼ似通った意味の次のような諺があるが，表現面ではD. L. やH. K. とは全く異る．

Ākhī se bhail oṭ ta man mẽ āil khoṭ

（Shāhābād 2）

〔訳〕　見えなくなると気がつかぬようになる．

〔意〕　目の前にあってこそ思いやりの気持がわくもの．

註4　H. L. K. にもH. K. と同じものが見られるが，意味は「目の前になにかをさし出せば山さえも見えなくなる」とあるのみで，用法の説明は十分でない．

註5　P. A. の説明は不十分であるが，用例を見れば，H. K. と同義のように思われる．

註6　P. A. にはH. K. と同じ意味に用いられる“akkhis dūr so dilõ dūr”という別の諺がある．

（7）

D. L.　Ākhõ ke andhe nām nainsukh

〔訳〕　めくらのくせに名はナインスク（「見る楽しみ」が字義，ほかにモスリン，花の名や盲人の異名でもある．）

〔意〕　主張と実際の相違すること．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕　名と実の相反すること．

F. L.　D. L. に同じ．nainsukh がshaikh roshanになる場合もある．

〔意〕　①名称や説明が当を得てないこと．

②知ったかぶりをすること.

K. K. Ãkh kā andhā nām nayansukh (Shāhābād — 2, Sāran — 1)

〔意〕 実際が名に反している場合に皮肉っていう.

〔原註〕 nayanasukh —目のよい人, 目を楽しませるもの.

P. A. Akkhã to anhī, tə nã nain — sukh (nūrbharī)

〔訳〕 D. L. に同じ.

〔意〕 一文なしのくせに大法螺をふくこと.

註1 K. K. の ãkh kā andhā における kā は Bhojpurī の属格形ではなく, ヒンドスターニーのものである. なお, K. K. に挙げられている異形 Ãkh kəsūr nām kamalnayan (paṭnā — 1)「めくらのくせにカマルナヤン〔蓮弁の如きうるわしい目〕とは」に関連して示されているところでは ãkho kə andhə ... である.

註2 F. L. の nainsukh と shaikh roshan との関係は (59) の muhammad fāẕil と vidyādhar とのそれに通じるものであり, 同種の差異のものは他にも例を見出すことができる.

註3 K. K. にはさらに同義の諺で次のものが見られる. ' Kānū kə nãw kamalnayan '
(Shāhābād — 2)

〔訳〕 めっかちの (くせに) 名はカマルナヤン (蓮の眼) とは.

註4 P. A. の用法は D. L. や H. K. の用法の特殊化されたものである.

(8)

D. L. Āg lagtə jhopṛā jo nikalə so lāo

〔訳〕 火事になったらなんであれ取出せるものを持ってこい.

〔意〕 ペルシア語で 'Az khiras mū'ə bas ast '
「相手が熊なら毛が取れればもうけもの」を用いるところ.

H. K. Āg lagtə jhopṛā jo nikalə so lābh

〔訳〕 火事になったらなにであれ取出せるものがあればもうけもの.

〔意〕 すべてを失うよりも少しでも残れば御の字.

F. L. Āg lagantā jhopṛā jo nikalə so lābh

〔意〕 H. K. に同じ.

K. K. Āg lagantə jhopaṛā jə nikalə sə pāy

〔訳〕〔意〕 H. K. に同じ.

P. A. なし.

註1 F. L. には lagantā jhopṛā が lagantī jhopṛī となる異形があるが, 意味には変りはない.

註2 Haim's Persian — English Proverbs (P. 23) によれば, 'Az khiras mū'ə' の形で出ており, cf. the E. "From a bad paymaster get what you can" とあり, khiras (熊) は吝嗇を擬人化したものと説明されている. また, saiyad mas'ud Hasan Rizwī, Farhang — ə — Amṣār, Lakhnau, 1958 には, ' Az khiras mū'ə bas ast' の形で出ており, 「熊 (が相手) なら毛一本でも十分. すなわち, 無法者とか有力者, あるいは, なに一つ期待できぬような人からならば, なんであれもらえるものがあれば有難いことと思うべし」と説明されている. このようにペルシア語の諺としては意味はほぼ一定している. しかし, H. K., F. L., 及び K. K. とは用いられた意味が異っている.

(9)

D. L.　Āṭhõ gãṭh kummait

〔訳〕　全身これ栗毛馬（非のうちどころのない栗毛馬）.

〔意〕　熟達者.

H. K.　D. L. に同じ.

〔意〕　全く狡猾な人.

〔原註〕　Kummait とは栗毛馬のことである. この種の馬はとても敏捷で速く走るものとされている.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕　狡猾な人, 悪辣な人.

K. K., P. A.　なし

註1　これは諺というよりイディオムと呼ぶべきものである. H. M. には「気の利いた, 抜け目のない」の意として挙げられている.

註2　Hindī Shabd Sāgar には, āṭh の項と kummet の項とに, この諺の説明が見られるが, 前者には(1)全能の(2)抜目のない(3)いかさまの, といった3つの意が述べられており, 後者には「全く抜目のない」のみが記されている. また, Mānak Hindī Kosh には「甚だ狡猾な, 全くのいかさま師」との説明がなされている.

註3　F. L. では諺（maṣal）に分類されている.

註4　H. L. K. にも「甚だ狡猾な人についていう」とある.

(10)

D. L.　Ādhī murghī ādhī baṭer

〔訳〕　にわとり半分うずら半分.

〔意〕　何事につけても二種の（対立的な）ものを併用する人（言葉。作法。信仰など）.

H. K.　① Ādhī murghī ādhā baṭer, ② Adhā tītar ādhā baṭer

〔訳〕　②しゃこ半分うずら半分.

〔意〕　ⓐ不釣合いなもの, ちぐはぐなもの. ⓑ幾つかの言葉が入り混ったもの.

F. L.　H. K. の②に同じ.

〔意〕　ⓐ不釣合いなもの. ⓑ不手際, 不体裁.

K. K.　H. K. ①と同じ（Paṭnā − 1, Mungher − 1）, H. K. ②と同じ（Shāhābād − 2）

〔意〕　中途半端なことをすること（を皮肉っていう）

P. A.　Addhā tittar, addhā baṭer

〔訳〕　H. K. ②と同じ.

〔意〕　一つのことに熟達せずいつまでも落着かぬことをいう.

註1　baṭer は女性名詞なのでこれを修飾するのであれば, ādhā ではなく ādhī でなければならぬが, D. L. を除き他はすべて ādhā となっている. H. K. の②は ādhā が対をなしていて, 名詞的に機能していると考えれば, 説明がつくが, H. K. の①は説明がつかない.

註2　ところが, パンジャーブ語では baṭer は男。女の両性に用いられたことがあるので（L. Jarvier, Dictionary of the punjabi Language, 1854, Reprint, patiala Ludhiana, 1970）, この問題は解決されよう.

註3　K. K. と P. A. の意味は接近している.

(11)

D. L.　Āp bābū mangate bāhar khare darvesh

〔訳〕 旦那自身乞食（同然）の身でありながら戸口に托鉢僧が立つ．

〔意〕 自ら無一文でありながら人に施すものがあろうものか．

H. K. Āp hī miyā̃ mangate bāhar khaṛe darvesh

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 自らを助け得ずして他人を助けることができようか．

F. L. なし．

K. K. Āp miyā̃ mãganī duāre darbes (Campāran — 1 ,3; Sāran — 1)

〔訳〕 D. L., H. K. に同じ．

〔意〕 力のない者が力のあるように見せかけることを皮肉っていう．

P. A. Āp miā̃ mangate bāhar khaṛe darvesh

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 自ら貧しいくせに人を助けるふりをすることについていう．

註1 これらの間には相互に一，二の語句の差異が見出されるが，起原的には同一のものと考えられる．しかし，意味上は D. L. 及び H. K. と K. K. 及び P. A. とでは重点の置き方が異なっている．

註2 なお，K. K. と同趣のものが次のように H. K. 及び F. L. に見られる．“Āp miyā̃ sūbedār ghar mẽ̃ bīwī jhoke̜ bhāṛ” （旦那は知事（スーベーダール），妻はかまどでたきぎくべ——家の中は火の車でありながらうわべは派手に振舞うこと）

（12）

D. L. Is se kyā ḥāṣil ki shāh jahān kī daṛhī baṛī thī yā ʿālamgīr kī ?

〔訳〕 あごひげはシャージャハーン（皇帝）のほうが長かったかアーラムギール（皇帝）のほうが長かったといって何になる．

〔意〕 馬鹿げたことを論じても得るものはない．

H. K. Shershāh kī dāṛhī baṛī yā salīmshāh kī ?

〔訳〕 シェールシャーのあごひげが長かったかサリームシャーのほうが長かったか．

〔意〕 馬鹿げたことについて口論すること．

F. L., K. K., P. A. なし．

註1 直截簡明な表現であるが，歴史上の人物が出てきているせいか分布も限られ，寿命も短かったようである．

註2 なお，シャージャハーンは老後にアーラムギール（アウランジーブ）に苦しめられたがそれに関連して次のような話が H. K. に記録されている．“Shāh Jahān ūṛhe, bagal mẽ̃ chaṛī, khāte-pīte bipat paṛī ”（シャージャハーン老いたれば，杖を頼る．安楽な暮らしに厄い来たる．）

註3 H. K. のシェールシャーはアフガン系スール朝のシェールハーン王（在位 1538 — 45），サリームシャーとはムガル朝第四代 Jahāngīr (1605 — 27) のことと考えられる．

註4 この部類の人名としては“Alamgīr sānī, cūlhe āg na ghaṛe pānī”（アーラムギールII世《ムガル朝第14代，1754 —59》の御代，かまどに火なく，水がめに水なし）とか“Jidhar maulā, udhar āsaf-ud-daulā ”（アーサフ ウッドウラー《アワドのナワーブ》も主の望まれる方へ——喜捨に励んだアーサフーウッドウラーでさえ神にさからうことはできなかった》などが H. K. に記録されている．

（13）

D. L. Ūcī dūkān phīkā pakwān

〔訳〕 立派な構えの店，風味のない料理

〔意〕 贈物をせぬ金持，口ぎたない学者，作品は味気ない高名な詩人，その他有名ではあるが風格のない人．

H. K. D. L. に同じ．

〔意〕 有名な人なのに働きはわずか．

F. L. D. L. に同じ．

〔意〕 実体が名声に反していること．有名なのに正体は賤しいこと．

K. K. Ũc dukān ke phīkā pakwān (Sāran — 1, Shāhābād — 2, Paṭnā — 1, Campāran)

〔意〕 有名な家柄や有名な人は名ばかりで大したことはしない．

P. A. Ucī dukān te phikkā pakwān

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 名が高いのに実質に欠けるものをいう．

註1 K. K. には属格 ke が使用されているが，意味上は D. L., H. K. と異ならない．

註2 いずれも『名物にうまいものなし』の意を含んでいる．すなわち，必ずしも名に実の伴わぬこと．

註3 ただし，H. L. K. は「内容がなく，見かけばかりのもの」とやや限定された意味をのべている．

(14)

D. L. Ũṭ pahāṛ ke nīce ātā hai to āp ko samajhtā hai

〔訳〕 山のふもとにきてみて駱駝は自分の背丈を知るもの．

〔意〕 自惚れ深い人は自分より勝れた人に出会って始めて自分の力を知るもの．

H. K. Ũṭ jab tak pahāṛ ke nīce nahī̃ jātā, tab tak hī jāntā hai 'mujh se ũcā koī nahī̃'

〔訳〕 駱駝は山のふもとに行くまで「自分が一番背が高い」と思っている．

〔意〕 D. L. に同じ．

F. L. Ũṭ jab tak pahāṛ ke nīce na āe apne se ũca kisi ko nahī̃ jantā

〔訳〕 H. K. に同じ．

〔意〕 だれしも自分以上の人に接してはじめて自分の力量を正しく認識するもの．

K. K. Ũṭ ke āpan ũcāī ke geyān pahāṛ tar gailā par bujhālā (Shāhābād — 2)

〔訳〕 駱駝は山のふもとへ行っておのれの背丈を知るもの．

〔意〕 F. L. に同じ．

P. A. なし．

註1 D. L. 及び H. K. においては「自惚れ深い人」が知るのであるが，F. L. 及び K. K. では「人間だれしも」になっている．

註2 意味上は4例とも共通でありながら表現上に相互にかなりの差があり，不安定なことがわかる．

(15)

D. L. Kaī din tum ne bhī cām ke dām calāye

〔訳〕 お前も幾日か革銭を通用させた．

〔意〕 お前もはかない栄華の日に罪深いことをしたものだ．

H. K. Cām ke dām

〔訳〕 革製の銭（ダーム）

〔意〕 とても安っぽいもの.

〔原註〕 Muḥammad Tughlak が1330年に金銀が不足したため代りに銅貨を発行した. この諺はこの話と関連がある.

F. L. H. K. に同じ.

〔意〕 安価に手に入るもの.

〔原註〕 Nizām Saqqā(Bihishtī) がフマーユーン王の命を救った礼に短時日王位につき同王の許可を得て革に金片を打って発行した貨幣.

K. K., P. A. なし.

註1 これは Cām ke dām calānā という イディオムに基いたものであり, 諺というよりイディオムというべきであろう.

註2 Cām ke dām は(ムガル朝)フマーユーン帝の御代 Bihishtī(散水夫) Nizām が 三日天下をとった際発行した革銭のこと. (Platts) Platts はこのイディオムの意味を「はかない権力を濫用すること」としている. したがって D. L. の説明と同義である.

註3 H. M. K. によれば これは ①無法を働くこと, ②大儲けをすること.

註4 Hindī Shabd Sāgar には散水夫 Nizām が溺れかけたフマーユーン王を救い, その礼に半日間, 王位についた. その際, 発行したのが革銭である, と説明している. また, イディオムとして Camṛe kā dām calānā とは「権力にまかせて行うこと, 無法な振舞い」と述べられている.

(16)

D. L. Kakṛī ke cor ko gardan nahī̃ mārte

〔訳〕 カクリー(きゅうりに似たうり科の植物及びその実)盗人の首は刎ねぬもの.

〔意〕 人のうっかりした過ちをきびしくとがめてはならぬ.

H. K. Kakṛī ke cor kī gardan nahī̃ mārte

〔訳〕 D. L. に同じ.

〔意〕 大した悪事でもないのに厳罰に処してはならぬ.

F. L. Kakṛī ke cor ko gardan nahī̃ mārte

〔意〕 小さな過ちをきびしく罰してはならない.

K. K. ① Kakrī ke cor ke kanaiṭhie bahut bā(Campāran — 1)

② Kakrī ke cor ke lāt mukkā jādā(Shāhābād — 1)

〔訳〕 ①カクリー盗人には耳ひねりで十二分.

②カクリー盗人に足蹴やげんこつはひどすぎる.

〔意〕 過ちの程度に応じて罰すべきだ.

P. A. なし.

註1 D. L. と H. K. とでは ko と kī とが違うが, この種の相違はヒンディーとウルドゥーにはしばしば見られるところである.

註2 K. K. は①②とも後半の表現が D. L., H. K., と異なっている. このような例は多くはない.

(17)

D. L. Karelā aur nīm caṛhā

〔訳〕 にがうり(つるれいし)はにがうりでも(にがみのある)ニームの木に巻きついたもの.

〔意〕 品性下劣の者が富を得ること.

H. K. Ek to karelā kaṛwā, dūsre nīm caṛhā

〔訳〕 もともと（にがい）つるれいしなのにおまけにニームの木に這ったときている．
〔意〕 賤しい者が悪い仲間に入り，にわかに出世して一段と悪くなること．
F. L. Karelā aur nīm caṛhā
〔意〕 もともと気むずかしかったのが，金まわりがよくなって束縛がなくなり一層気まぐれになった．
K. K. Ek ta karailā apanaiṅh tīt dosre nīm caṛhal (Munghcr — 1, Sāran — 1)
〔訳〕 H. K. に同じ．
〔意〕 もともと悪い上に悪い仲間に入ること．
P. A. Karelā kauṛā, uh vī adhrijjhiā
〔訳〕 にがいにがうり，おまけに半煮え
〔意〕 以前から困難のあったところへさらに支障の生じること．
註1 いわば，H. K. での用法はD. L. 及びK. K. の用法をあわせたものである．
註2 D. L. は表現上，H. K. やK. K. の簡略形ということになる．
註3 P. A. の意味は他に比べると甚だ特殊化している．
(18)
D. L. Qāẓī jī tum kyõ duble ho (?) Shahar ke andeshe se
〔訳〕 「カージー（法官）さん，なんで痩せてござる．」「街の心配事で．」
〔意〕 見当はずれの悩みや心配事に陥ること．
『杞憂』
H. K. Qāẓī jī duble kyõ ? Shahar ke andeshe se
〔意〕 他人のことを余計に心配すること．
F. L. Qāẓī jī kyõ duble ? Shahar ke andeshe se
〔意〕 わけもなく他人のことで心配にふけること．
K. K. Kājī jī dubar kāke (?) Sahar ke anesā se (Shāhābād — 2, Saran — 1, Campāran — 1)
〔意〕 無駄な心配をすること．
P. A. Kājī nũ shahir dā jhcrā
〔訳〕 カージーは町のことが心配．
〔意〕 自分の任務はおろそかにして他人のことを心配すること．
註1 K. K. はBhojpurī の表現になっているが，音韻面のみで，語彙・語句の面では他と同じ．
註2 意味の上では，厳密には，D. L. と K. K. 及びH. K. とF. L. との二つに区別すべきであろう．P. A. はH. K.，F. L. と同列に入るが「自分の任務をおろそかにする」ことが少し異なる．
(19)
D. L. Kānā ṭaṭṭū buddhū nafar
〔訳〕 めっかちの馬に間抜けな馬丁．
〔意〕 全くの無一文．素寒貧．
H. K. D. L. に同じ．
〔訳〕 めっかちの馬に間抜けな馬丁．いずれも負けず劣らず．
〔意〕 器具や道具類が不揃いであったり，欠けていたりすること．
F. L. D. L. に同じ．

〔意〕 欠けたりつぶれたりして不揃いの道具類.

K. K. なし.

P. A. なし.

註1 D. L. の用法と H. K. 及び F. L. の用法との間にはほとんど関連の見出されないほどの隔たりがある.

註2 Kānā には「片目(の)」以外に「愚かな」の意もあるので Kānā は buddhū と重なった効果もあげているわけである.

註3 H. L. K. は用法を,「いつも道具類が不揃いの人を評する際に」と説明している.

(20)

D. L. Kāne coṭ kanauṇḍe bheṭ

〔訳〕 片目, 怪我, 避けたい人には出くわすもの.

〔意〕 この諺は, 憤りを感じている相手とか会いたくない人とか, ある時刻にある方角へ出かけることを知られたくない人に偶然出くわした際に用いられる.

H. K. Dukhte coṭ, kanauṛe bheṭ

〔訳〕 怪我をした上に片目に出くわした.

〔意〕 避けたい人には出会うもの.

F. L., K. K., P. A. なし.

註1 片目の人と出かける途中で出会えば不吉の兆とする俗信がある.

註2 J. T. Platts はそのウルドゥー・ヒンディー・英語辞書にこの諺を記録している.「いやな事やいやな人は避けられぬもの.」

註3 H. K. の直訳は編者によるが, このような解釈には疑問がある.

(21)

D. L. Kulhiyā mẽ guṛ phoṛ rahā hai

〔訳〕 クリヤー(素焼の碗)の中で黒砂糖を砕いている.

〔意〕 全く秘密裡になにかをすること, あるいは, 内緒話をすること.

H. K. Kulhiyā mẽ guṛ nahī̃ phuṭṭā

〔訳〕 クリヤーの中では黒砂糖は砕けない.

〔意〕 大仕事は内密にはできぬもの.

F. L. Kulhiyā mẽ guṛ thoṛā hī phūṭṭā hai

〔訳〕 クリヤーの中では黒砂糖はめったに砕けない.

〔意〕 ⓐ悪事はどうしても人に知れてしまうもの.

ⓑ秘密はどうしても洩れてしまうもの.

K. K., P. A. なし.

註1 D. L. と H. K. 及び F. L. とでは肯定表現とで, 意味にも相違点がある.

註2 'Kulhiyā mẽ guṛ phoṛnā" はイディオムで,「大仕事を小人数ですること;不可能なことを試みること;内緒でなにかをすること」(Platts)の意を持つとされるが, F. L. でも①内緒ですること②不可能なことを試みること, としてやはりイディオムとされている. H. K. では phoṛnā のかわりに pakānā(煮る, つくる)が同義とされ, 次の三つの意味に用いられている. ①なにかを人に全く気づかれさえせずにすること. ②わずかなものを支えに甚だ大きなことをすること. ③わずかな人に大仕事をさせること. (H. M. K.)の意とされる. これもイディオム扱いである.

註3　このように見てくると，クリヤーが割れやすいものであるので，D. L. の意味に限定する用法は不自然であり，H. K. や F. L. の意味に用いるのが本来的であろう．

(22)

D. L.　Koṛh mẽ khāj

〔訳〕　らい病の上にかいせん（に罹った）．

〔意〕　難題の上に難題がのしかかること．

『泣き面に蜂』

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕　D. L. に同じ．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕　D. L. に同じ．

K. K.，P. A. なし．

註1　F. L. は次のような異形をあげている．　ek to koṛh us par khujlī aur ʻazāb — i — jān（一つにはらい，その上かいせん，さらには死の苦しみ）

(23)

D. L.　Kyā darzī kā kūc kyā muqām

〔訳〕　仕立屋に旅も逗留もあるものか．（内も外もない）

〔意〕　貧乏人はいつどこへ行くにも仕度の手間はかからぬもの．

H. K.　kyā darzī kā kūch, kyā muqām (?)

〔訳〕　仕立屋の持物があろうか，宿があろうか．

〔意〕　職業柄歩き回る人のこと．

〔原註〕　これはミシンが発明されず，仕立屋が得意先に行って縫物をしていた頃のことである．大抵，針と糸を持って村から村へと歩き回っていた．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕　ⓐ独り者は家にいようが外にいようが特別困ることはない．

ⓑ一文無しには旅装を整える煩しさはない．

K. K.，P. A. なし．

註1　D. L. の kūc のほうが H. K. の kuch よりも本来的で自然なものと考えられる．ʻ kūc — maqām ʼ「行進と休止」という表現があることからも kūc のほうを原形と認めてよいだろう．

註2　仕立屋というのは貧乏人の代名詞と考えてよいのか？　K. K. には次のことわざがある．Darjī ke beṭā jab le jīe tab le sīe(Camārēn — 1) 仕立屋の息子は死ぬまで縫いもの（貧乏人の息子は生涯働かねばならぬ．）

(24)

D. L.　Kyā nangī nahāyegī kyā nicoṛegī

〔訳〕　裸で水浴びしてなにをしぼろう（か）．

〔意〕　貧乏人は無力なもの．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕　一文無しは自分のものも他人のものも買う金持たぬ．（どうしようもない）

F. L.　① D. L. に同じ．② Nangī kyā nahāegī kyā nicoṛegī

〔意〕　一文無しはやるものももらうものもない．一文無しは素寒貧．

K. K.　なし．

P. A.　Nangī nāwegī kī te nacoregī kī (nangī nahwe kī nicore kī)
〔訳〕　D. L. に同じ.
〔意〕　貧しい人や無力な人は他人を手助けすることができぬ.

註1　これは動詞が女性形であることから省かれている主語は女性であることがわかる. 池や川, あるいは, 人目につかぬところでも全裸にならず沐浴する風習を背景にできた諺である. したがって, ここでは衣服らしい衣服を身につけず丸裸同然の身であれば, 沐浴後しぼるものもない, との意. " Nangā nāce phaṭe kyā " (着物もない男が踊っても破れるものはない) という諺もある.

註2　nangī には裝身具を持たぬ (貧しい) 女の意もあるが, 水浴びとの関連では次の諺も参考になろう. " Nangī ne ghāt rokā, nahāwe na nahāne de " (裸の女が沐浴場に立ちはだかった. 自分も水を浴びず人にも浴びさせず.)

註3　H. L. K. には「一文無しは自分が食べることも人に食べさせることもできぬ」との説明がなされている.

註4　P. A. は同趣の諺として次のものも記している. Kī piddī te kī piddī dā shorbā
〔山雀 (の肉) もないのに山雀汁がつくれようか〕

(25)

D. L.　Khaṛī mazdūrī cokhā kām
〔訳〕　よい手間賃多くの仕事.
〔意〕　よい労賃を払い大いに働かせること.
〔原註〕　今日では Khaṛī のかわりに Kharī を用いる.

H. K.　Khaṛī majūrī cokhā kām
〔訳〕　高い手間賃, 立派な出来.
〔意〕　高給を払えば出来映えよし.

F. L.　Kharī mazdūri cokhā kām
〔訳〕　現金払えばよい仕事.
〔意〕　労賃を現金で払えば出来上りもよく仕事も早い.

K. K.　Khar majūrī cokhā kām (Paṭnā — 1)
〔意〕　H. K. に同じ.

P. A.　Kharī majūrī cokhā kamm
〔意〕　よい手間賃を払えば仕事の出来も多い.

註1　今日, 地方的な用法を除けば, D. L. のように cokhā を「多く」の意に用いることはない. 「鋭い, 勝れた, 立派な」などの意に用いられるのが普通で, F. L. の意にも一般には用いられない.

註2　Khaṛā = Kharā が「多い」意に用いられるのは多く古い用法に見られるところである.

註3　H(indī)　S(habd)　S(āgar) には F. L. のように Kharā が「現金の」意に用いられた例として, この諺が挙げられている. (Ratannāth' sarshār', Fisāna — e — Azād)

(26)

D. L.　Khānā pīnā gāṭh kā, nirī salām 'alaik
〔訳〕　飲み食いは自前, 挨拶だけ.
〔意〕　偉い人がそっけなくぞんざいな答礼をすること.

H. K.　Khānā pīnā gāṭh kā nirī salām 'ālek
〔意〕　慇懃無礼なこと.

F. L., K. K., P. A. なし.

註1　D. L. と H. K. の意味のへだたりは大きい. gā̃ṭh kā は「手元, 手元金, 懐中」ほどの意に解するのが妥当である.

註2　Khānā pīnā には「飲食」及び「飲食代」の意があるので, 全体としては D. L. のように解するのが適当かと思われるが, 今一つ明確ではない.

(27)

D. L.　Khel na jāne murghī kā, uṛāne lāgā bāz

〔訳〕 にわとりの遊びを知らずたかを飛ばせ始めた.

〔意〕 能力以上のことをしようとする人を皮肉っていう.

H. K.　Khel na jāne murghī kā, uṛāne lagā bāz

〔意〕 やさしいこともわきまえず難しいことをやろうとすること.

F. L., P. A. なし.

K. K. には H. K. の引用がみられるのみ.

註1　にわとりの遊びとは闘鶏のこと, たかを飛ばせるとは鷹狩りのこと.

(28)

D. L.　Gadhā kyā jāne za ʻfarān kī qadr

〔訳〕 ろばにサフランの値打ちがわかろうものか.

〔意〕 ʻShaikh kyā jāne ṣābun kā bhāʼ と同じ (→(80)).

H. K.　Gadhe ko zaʻfarān

〔訳〕 ろばにサフラン.

〔意〕 ʻGadhe ko gulqandʼ「ろばに薔薇菓子」, (器でないものによいものを与えること) と同じ.

『猫に小判』

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕 愚者はものの真価を理解できぬもの.

K. K.　なし.

P. A.　Gadhe nū̃ gulkand

〔訳〕 ろばに薔薇菓子.

〔意〕 器でもない人に高価なものや立派なものを与えること.

註1　H. K. は D. L. のつづまった形であろう. 意味としては D. L. と H. K. とは同趣であるが, D. L. の (80) とは同じでも H. K. の (80) とは趣の違う点を注意しなければならない.

(29)

D. L.　Gharīb kī jorū sab kī bhābī

〔訳〕 貧乏人の妻は皆の兄嫁.

〔意〕 貧しくおとなしい男は人から勝手なことを言われても言葉をかえすことができぬこと.
(貧しければだれからもつけ入られる.)

H. K.　Gharīb kī jorū sab kī bhābhī

〔意〕 人はみな貧しい者を身勝手に利用するもの.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕 人はみな貧しい人に無理をいうもの.

K. K.　Garīb ke jorū sab ke bhaujāī (Munger — 1, Shāhābād — 1)

→ Abarā kə məharārū gānw bhar kə bhaujāī (Shāhābad — 2, Campāran — 3)

〔訳〕 弱い者の妻は村中の（人の）兄嫁.

〔意〕 弱い人の持物を不当に利用すること.

P. A. Gharīb dī jorū (tīmī)jaṇə khaṇə dī bhābī

〔訳〕 弱い者の妻はだれもの兄嫁.

〔意〕 弱い人や無力な人の持物はだれもが（勝手に）利用する.

註1 D. L. 及び F. L. の bhābī はウルドゥーで普通に用いられる形で，ヒンディーでは H. K. や K. K. のように bhābhī，もしくは，bhaujāī で見られる．一般にヒンドゥーにあっては弟（兄嫁からの呼称 dəvar）と兄嫁（bhābhī）とは 冗談も言い会えるほどの親しい間柄にあるが，それ以外の男女の間については厳格に過ぎるほど制限が強い．まして他人の妻になれなれしく声を掛けるなどもってのほかなのに，貧乏人の妻はだれからもなれなれしくされる，というわけである．

註2 それぞれの諺の間には互いに微妙な意味の違いが見られる．

註3 B. K. には（2）で説明したように次の諺が見られる．

'Burbak kə məhrārū sabh kə bhaujāī'

〔訳〕 愚か者の嫁はみなの兄嫁

〔意〕 愚か者の妻はだれからもなれなれしくされる．これは表現上は Burbak が Gharīb にかわっているのを除けば他は D. L. や H. K. などと同じである．意味上も部分的には（2）に似通っているが，全体としてはやはりここに掲げられたものの同類である．

註4 H. L. K. は bhābī 形と bhaujāī 形の両方を挙げており，「貧しい人やおとなしい人は人に無理をいわれるものだ」としている．

註5 パンジャブ語には既出（2）の前半の語句と D. L. の（29）の後半から成る異形がある．"Anhə dī jorū, sarīān dī bhābī" 意味は「無力な人が自分の所有物をしっかり管理できぬこと」となっている．

（30）

D. L. Gur khānā gulgulõ sə parhəz(karnā)

〔訳〕 黒砂糖は食べるのにグルグラーは食べぬこと．

〔意〕 ある人と親しいと言っておきながらその人の親や子の話が出ると知らぬふりをすること．

H. K. Gur khāə gulgulõ sə parhəz

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 悪事を働いておりながら同じような悪事は避けるふりをすること．

F. L. D. L. に同じ．

〔意〕 大きな悪事は平気でしていながら小さな悪事は避けようとすること．

K. K. Gur khā kə gulgulā sə parhəz

〔意〕 大きな過ちを犯しておきながら小さな過ちを犯さぬふりをすること．

P. A. Gur khāṇā tə gulgulīã tõ parhəz

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 悪いことをしておきながらそれほど悪くはないことを避けること．

註1 gulgulā とは，小麦粉，黒砂糖，凝乳にういきょうの実やしょうずくの実を混じてだんご状にし，ギー（精製バター）であげたもの．

註2 D. L. とその他とでは意味合いが大きく異なる．すなわち，前者が「身勝手」について述べているのに対し，後者は「偽善」について述べている．ただし，P. A. は D. L. に近い．

(31)

D. L.　Ghaṛī mẽ ghaṛiyāl hai

〔訳〕 今すぐ(時の)鐘(が鳴る).

〔意〕 世の中はまたたく間に変わる.

〔原註〕 ghaṛiyāl とは分厚い鉄板もしくは青銅板で時報のために打ち鳴らすもの.

H. K.　D. L. に同じ.

〔意〕 時の移り変わりは激しいもの, いつどうなるやら知れぬ.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕 (1)人間の寿命は瞬く間に尽きるもの. (2)この世は刻々と移り変わるもの.

K. K., P. A. なし.

註1　これはイディオムとしてH. M. K. に記載されている.

Ghaṛī mẽ ghaṛiyāl bajnā = Ghaṛi mẽ ghaṛiyāl honā　例文にあるように(Ghaṛī mẽ ghaṛiyāl ho jātā hai, ham kal kī bāt kā kaise vishvās dilāe)常にhaiで用いられるのでなく...ho jātā haiともなるのであれば, 確かにイディオム的要素を有しているともいえよう. しかし, その変異の度は限定されているのであるからやはり諺に入れるべきであろう.

(32)

D. L.　Ghar kā bhedī lankā ḍhāe

〔訳〕 内部の秘密を知る者がランカー島を破滅せしめる.

〔意〕 秘密を知る者が敵になればどんな害でももたらすことができる.

H. K.　Ghar kā bhedī lankā ḍhāwe

〔意〕 仲違いは全体の破滅のもと.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕 秘密を知る者が敵になるのが最も危険.

K. K.　Ghar ke bhediyā lankā ḍāh

〔意〕 秘密を知る内部の者が破滅をもたらす.

P. A.　Ghar de bhetī rāvan māriā

〔訳〕 内情を知る者がラーヴァナを殺した.

〔意〕 内部の不和が破滅のもと.

註1　Q. A. はD. L. 形と同じものを挙げ意味を二様述べている. ①用心していても仲違いが生ずれば混乱の因となり, 敵につけこまれることになる. ②秘密を知る者と仲違いになると甚だ危険である. 用法として, 仲違いの結果, 損害を被ったり, 身内の者が仇と結んだりした際に用いられることが多いとしている.

註2　P. A. のみが他と同一の話(ラーマーヤナ)に基き同趣のことを述べながらも後段の表現が違うことが注目される.

(33)

D. L.　Ghar kī puṭkī bāsī sāg

〔訳〕 家にあるものといえば一つまみの豆粉と食べ残しのおかず.

〔意〕 大法螺吹きを皮肉っていう.

H. K.　D. L. に同じ.

〔訳〕 家には一つまみの小麦粉と残りもののおかずしかない(のに大きなことをいう.)

〔意〕 大風呂敷(を評していう言葉).

F. L.　Ghar kī paṭkī bāsī sāg

〔意〕 家には（金属製の上等のものはなく）素焼の台所道具と古くなったおかずしかないのに，家の外では大法螺を吹くこと．

K. K.，P. A. なし．

註1　puṭkī とは料理の汁を濃くするために入れるひよこ豆の粉や麦粉のこと．

註2　F. L. では paṭkī になっている．ただし，F. L. の意訳には上のような説明になっている．

(34)

D. L.　Ghar kī murghī dāl barabar

〔訳〕 内のにわとり（めんどり）はダール（ひきわり豆）と同じ．

〔意〕 この諺は息子や親密な間柄の者，友人あるいは忠実な下僕，有能な部下を大切にせずよその人をほめたり金を出して仕事をさせたりする場合に用いられる．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 身近なものは軽んじられる．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕 身近なものは勝れたものまで軽んじられる．

K. K.　Ghar kī murghī dāl barobar（各地）

〔訳〕 家に飼っているにわとりは豆と同じこと．いつでも好きな時に利用される．

〔意〕 家の中にあるものは重んじられず勝手な時にぞんざいに利用される．

P. A.　Ghar dī murgī (kukrī) dāl barābar

〔意〕 身近にあるものはすぐれたものでもつまらぬように思うこと．

(35)

D. L.　Cānd ko gahan lag gayā

〔訳〕 月に蝕．

〔意〕 ありとあらゆる美点をそなえていながらただ一つ欠点のあること．

『玉に瑕』

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 品行正しき人の名に汚点のつくこと．

F. L.　D. L. と同じ．

〔意〕 ①勝れたものに瑕のつくこと．②美しいものに瑕のつくこと．③美しい人が醜い人と結婚すること．④D. L. と同じ．

K. K.　なし．

P. A.　なし．

註1　F. L. をはじめその他の用法からこれがかなり広く応用されることが知られる．

註2　ただし，H. K. の用法は限定されている．

(36)

D. L.　Corī kā guṛ mīṭhā

〔訳〕 盗んだ黒砂糖は（よけいに）甘い．

〔意〕 ただで手に入れたものは一段と味わい深い．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 よそのものやただのものはなかなかよいものだ（特に人妻と関係を持つ男について用いら

れる．）

F. L.　Corī kā guṛ mīṭhā hotā hai

〔意〕　D. L. に同じ．

K. K.　なし．

P. A.　Corī dā guṛ miṭṭhā

〔意〕　D. L. に同じ．

註1　P. A. には次の異形がある．Corī dā māl miṭṭhā hūdā hai

〔訳〕　盗んだ品は大切なもの．

（37）

D. L.　Choṭā munh baṛī bāt

〔訳〕　小さな口で大きな話．

〔意〕　力量以上のことを試みること．（一人称，三人称両方に用いられる．）

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕　目上の人に対して無礼な振舞いをすること．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕　能力以上のことをしようとすること．

K. K.　Choṭ mũh baṛ bāt

〔意〕　長上の人を前にして大きな口をきくこと．

P. A.　Choṛṭā mũṇ vaḍḍī gall

〔訳〕　D. L. に同じ．

〔意〕　特別の力量を持たぬのに大きな口をきくこと．

註1　基底においては共通するのであるが，意味上D. L.，F. L. の場合とH. K.，K. K. の場合とでは意味の重点がちがう．いずれにもこの両方の意味は書かれておらず，いずれか一方だけが書かれている．

註2　P. A. においては上のいずれとも意味の重点の置きどころがちがう．

（38）

D. L.　Jangal mẽ mor nācā to kis ne(kin ne)dekhā

〔訳〕　荒野で孔雀が踊ったのをだれが見たか．

〔意〕　友人や仲間から離れたところで富や力を得たところでなにが嬉しかろう．栄達の喜びは仲間の内にあって味うものだ．

H. K.　Jangal mẽ mor nācā, kisne jānā ?

〔訳〕　荒野で孔雀が踊ったとてだれがそれを知ろう．

〔意〕　知合いのいないところや値打ちのわかる人のいないところで力量を発揮したり富や力を示したとてなにになろう．

F. L.　Jangal mẽ mor nācā kisne dekhā (tamāshā)

〔意〕　①仕事はみなの見ている前でして見せなければならない．人のいないところや異郷でして見せたところで何の得になろう．

『錦を着て夜行くが如し』

②勝れたことを人目につかぬところで行なうこと．

K. K.，P. A. なし．

註1　K. K. にはこれに該当するものは記載されていないが，B. L. には“Jangal mẽ mor

nācal, ke dekhal ?" の形で出ており，「人目につかぬところで起きた事で目撃者のいないこと」と説明されており（P. 93），上のいずれとも異なる意味に用いられている．

註2　H. L. K. には，'Jangal mẽ mor nācā kis ne dekhā' の形で出ており，「才ある人がそれを認める者がだれ一人いないところでその才を発揮した際に用いられる」と説明されている．

（39）

D. L.　Jo garajte haĩ so baraste nahĩ

〔訳〕　雷鳴をとどろかせるのは雨を降らせない．

〔意〕　大きな事を言う人はなにもできないものだ．

H. K.　Jo garajte haĩ wah baraste nahĩ

〔意〕　法螺吹きは役立たぬもの．

F. L.　H. K. に同じ．

〔意〕　H. K. に同じ．

K. K.　Je garajale se barasale nā (Campāran — 2, Munger — 1)

〔意〕　口達者には実のある仕事はできぬもの．

P. A. なし．

（40）

D. L.　Jogī kāke mīt

〔訳〕　ジョーギー〔ヨーギー，ヒンドゥー教の行者〕はだれの友か．

〔意〕　住所の定まらぬものはだれにも親しまぬ．

H. K.　Jogī kiske mīt

〔意〕　ジョーギーはだれの友でもない．（世捨人であるから）

F. L.　H. K. に同じ．

〔意〕　住所の定まらぬ者や他人とかかわりのない者はだれの友にもならぬ．

K. K.　Jogī kekar mīt besyā kekar nārī (Shāhābād — 2)

〔訳〕　ジョーギーはだれの友，女郎はだれの妻．

〔意〕　ジョーギーはだれの友でもなく，女郎はだれの妻でもない．

〔原註〕　後段を'rājā kekar hīt'（王はだれの友）　ということがあるが，大意はほぼ同じである．

P. A.　Jangal gae nā bahure, jogī nā kise de mīt

〔訳〕　森へ行った者は人の力にはならぬ．ジョーギーはだれの友でもない．

〔意〕　友情に応えることのない人を好きになること．

註1　H. K. には次の諺が見られる．'Jogī keh ke mīt kalandar keh ke sāth'（ヨーギーとカランダル《ムスリムの行者》はだれの友でもない．いつも遊行しているからである．）

註2　K. K. は上の kalandar の意を熊まわしとしている．

註3　H. K. には上の K. K. に対応する次の諺も見られる．"Jogī kiske mīt aur pātar kiskī nār"（ジョーギーはだれの友，女郎はだれの妻）

註4　P. A. には後段の異形に次のものがある．Jogī te darvesh（ジョーギーとダルヴェーシュ《シュ《ムスリムの遊行僧》）

註5　いずれにしても用法は P. A によって明らかにされるようである．

（41）

D. L.　Jo bole so ghī ko jāe

〔訳〕 言い出した者がギーを取りに行くこと．(?)
〔意〕 家でも外でも正直に口をきけばひどい目にあったりはずかしめられたりする．
H. K. D. L. に同じ．
〔意〕 ①一つのことを馬鹿正直に続けること．②忠告した者が体まで動かすこと．
F. L. Jo bole kuṇḍā khole
〔訳〕 返事をした者が錠前をあける．
〔意〕 仕方を教えた者がして見せねばならなくなること．
K. K. Je bole se kiwāṛ khole (Muzaffarpur — 2)
〔訳〕 （家にいると）返事をした人が戸も開けねばならぬ．
〔意〕 'Je rāh batāwe se āge cale' (Shāhābād — 2) に同じ．（道を教える人が先に立って行くこと．） 道を教える人に道案内をさせること．
P. A. なし．
註1 H. K. にはF. L.，K. K.，と同じものが，H. K. の②の意味に用いられている．
註2 H. L. K. にはF. L. 形と同じものが，H. K. の②の意味に用いられている．
(42)
D. L. Ḍīl dar gunbad āwāz dar phish
〔訳〕 図体は（大きな）塔（ほど）（出る）音はプスッ．
〔意〕 図体に似合わぬ小心者
H. K. Ḍīl ḍaul gumbaj āwāz dar phiss
〔意〕 見かけは頑健，声は蚊のなくよう．
F. L.，K. K.，P. A. なし．
註1 邦語の『うどの大木』『大男の見かけ倒し』とは異なる．
(43)
D. L. Ḍhaltī phirtī chāwā kabhī idhar kabhī udhar
〔訳〕 ゆれ動く影あちらへ行ったりこちらへ来たり．
〔意〕 金は一人のところに留まっていない．
H. K. Ḍhaltī phirtī chāh hai
〔訳〕 ゆれ動く影
〔意〕 人の運勢はわからぬもの．
F. L. Ḍhaltī phirtī chāwan kabhī idhar kabhī udhar
〔意〕 人の運勢や富はいつどうなるかわからない．
K. K.，P. A. なし．
註1 富を「ゆれ動く影」になぞらえた表現であるが，重点は自分のほうにまわってきてどうにかなることではなく，はかないものであるからそれを得たとておごるべからず，ということにある．『金は天下の廻り持（物）』とは全く異なるわけである．
註2 なお，Ḍhaltī phirtī chāyā は「影のようにはかないもの」の意のイディオムとして使用されている．（H. M. K.）
(44)
D. L. Ṭabele kī balā bandar ke sar
〔訳〕 うまや（厩）の厄神（バラー）は猿の頭に．
〔意〕 評判が悪ければいつも濡衣を着せられる．

H. K.　Ṭabele kī balā bandar ke sir

〔意〕 面倒なことが全部だれか一人にだけふりかかること.

〔原註〕 厩に猿を繋いでおくと馬の病気はみな猿に移り，馬は元気になるものと一般に信じられている．このため大きな厩には大抵猿が繋いである．この諺はこの風習に基いたものである．

F. L.　Ṭawele kī balā bandar ke sar

〔意〕 ①幾人分かの難儀が一人にふりかかること．②他人の過ちで罰を受けること．

K. K.　なし．

P. A.　Ṭabele dī balā, b̃adar de sir

〔意〕 F. L. の②に同じ．

註1　Ṭabela は語源的にはアラビア語由来で Ṭawīla（家畜を繋ぐ綱，かせ，厩，などの意）．

註2　D. L. の用法は H. K.，F. L. のそれとは異なる．F. L. の②の用法とも異なる．②の当人は評判が悪いとは限らぬ．

註3　Q. A. は馬を伝染病から守るために流行の予知に猿を厩で飼う風習を述べ，身分の低い者がいつも災厄の因にされ，身分の高い者が不問にされたり，悪事があれば身分の低い者の責任にされるような際に用いられる，と用法を説明している．

註4　Q. A. によればこの諺はペルシア語由来のもののようである．また，異形として sar の代りに gale の用いられるものを掲げている．

註5　また，‘Farhang — ē — amṣār’ (Saiyid Hasan Rizvī, Lakhnau, 3rd ed., 1958) によれば，このペルシア語の諺‘Balā — ē — ṭavīla bar sar — ē — maimūn’はウルドゥーの‘Kar jāe ḍāṛhī — wālā pakṛā jāe m̃ũcho̜ — wālā’（他人のしでかした過ちの科を受けること）と同じ意味に用いられる．すなわち F. L. の第二の意に用いられることになる．

（45）

D. L.　Tinke kī oṭ pahāṛ

〔訳〕 わらのかげに山（がかくれる）．

〔意〕 どんなものにも知られていない取柄があるもの．

H. K.　D. L. に同じ．

〔訳〕 わらを目の前にすれば山がかくれる．

〔意〕 ①とても小さなことから大事に至ることがあるということ．

②小さなものになにか大きな秘密がかくされていること．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕 ①ちっぽけなものにも大切なものが秘められていること．

②困難がほんのわずかの工夫で解決すること．

K. K.，P. A　なし．

註1　F. L. においては諺としてではなくイディオムとして説明されている．

註2　H. M. K. にも‘tinke kī oṭ pahār chipānā’（わらで山をかくす）「小さなことに大きなことをかくすこと」のようにやはりイディオムとして数えられている．

註3　D. L. と F. L. の①とは近しい意味に用いられている．

（46）

D. L.　Tumhāre laṛke bhī kabhī ghuṭno̜ ke bal calege̜

〔訳〕 お前の息子もいつか這うようになろう．

〔意〕 お前もほんとうのことを話すようになり正しい道に戻るだろう．

H. K.　Tumhāre laṛke bhī ghuṭniyõ calẽge ?

〔訳〕 お前の息子も這うだろうか．（女性が用いる）

〔意〕 ①お前はいつか約束を果たすだろうか．

②お前はいつかほんとうのことを話すようになるだろうか．

F. L., K. K., P. A.　なし．

註1　これの用法は不明確である．

(47)

D. L.　Daryā mẽ rahnā aur magarmacch se bair

〔訳〕 川にすみながらわにと仲違い．

〔意〕 厄介になっていながらその家の息子とか支配人などを憎むこと．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 世話になっていながらその人とけんかをするのはよくない．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕 居住地の有力者たちに対抗すること．

K. K.　Jal mẽ basī magar se bair (Campāran — 3, Muzaffarpur — 2)

〔訳〕 水中にすみながらわにと仲違いとは．

〔意〕 庇護してくれる人と仲違いするのはよくない．

P. A.　Darīāvā vicc rahiṇā te magarmachā nāl vair

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 自分の居るところの有力者と仲違いすると苦しむことになる．

註1　F. L. と P. A. とは異なり，対抗する相手には直接恩義はない．

註2　B. L. には"Jal mẽ rahke magar se bair"の形で出ており，「ちっぽけな生きものが強いものに敵意をもつこと」とされている．（P. 95）

(48)

D. L.　Dãt par mail nahĩ

〔訳〕 （なにも食べていないので）歯くそなし．

〔意〕 赤貧洗うがごとし．

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 D. L. に同じ．

F. L.　Dãt par mail na honā

〔訳〕 歯くそなきこと．

〔意〕 ①極貧であること．②歯がきれいなこと．

K. K., P. A. なし．

註1　F. L. ではイディオムとして扱われているが，H. M. K. でもやはり同じ扱いをされている．

(49)

D. L.　Dāī ke sar phūl pān

〔訳〕 弱い子は乳母（ダーイー）に．

〔意〕 弱い者はなにかにつけて濡れ衣を着せられひどい目にあわされる．

H. K.　Dāī ke sir pān phūlā

〔訳〕 産婆の頭にパーンプーラーを．

〔意〕 男児出生を喜んで産婆にいう言葉.
〔原註〕 1子供たちが隠れん坊遊びの際口にする. この諺はそれから採り入れられたもの. Pān phūl は装身具の一である. 2この諺はムスリムの女性が使用する.

F. L. Dāī kə sar pān phūl

〔意〕 弱い者はどんな濡れ衣を着せられるかわからない.

K. K., P. A. なし.

註1 'Dāī' には乳母, 産婆, 子守り, 隠れん坊遊び, などの意がある.

註2 "Pān phūl" には次のような意がある. ①ありきたりの贈物 ②極度にきゃしゃなもの (以上, Hindī Shabd Sāgar) ③非難, とがめだて ④並みの結果 ⑤きゃしゃな体の子供, きゃしゃな体 (以上, F. L.)

註3 'Phūl pān' には次のような意がある. ①「(花とかパーンのように) 弱々しいもの, きゃしゃな (以上, Mānak Hindī Kosh) ②世話, 心づかい ③非難 ④きゃしゃな, きゃしゃな体 (以上, F. L.)

註4 このように Phūl pān と Pān phūl は意味を共有する部分がある. しかし, ここでは H. K. は別にしても2の③と⑤, 3の③と④のいずれを D. L. 及び F. L. に採るかは難しい問題である. ただし, D. L. にはこれとは別に 'Pān phūl' という言葉の意味が「きゃしゃな体」(P. 135) とあるので一応の参考になろう.

(50)

D. L. Dəkhā bhālā topcī, caprā caiyad ho

〔訳〕 顔見知りの大砲打ち (砲手) がにわかにサイヤドに.

〔意〕 財産が自慢でならぬ成金を乞食同然の頃から知っている.

H. K. Dəkhā bhālā topcī aur caprā saiyad hoy

〔訳〕 ただの大砲打ちだったのをみなが知っているが, 今ではにわかサイヤド (になって肩で風を切る).

〔意〕 空威張りすること.

F. L., K. K., P. A. なし.

註1 サイヤドはインド亜大陸のムスリムで教祖マホメットの血統を引くと称する人々の称号で最も高貴な出身とされる. ただし, これが血統のみでなく経済的・階級的な要素を含んでいるのでこのような諺が生まれたのであろう. (参照→H. Risley The people of India, 2nd ed., Delhi, 1969, P. 121)

(51)

D. L. Do mullā mẽ murghī murdār

〔訳〕 二人のムッラーが争ううちににわとりは死んでしまう (不浄になってしまう)

〔意〕 これは次のような場面で用いられる. ある人がなにごとか大切なことをその権威筋に検討を願い出たところ二人の権威が争論を始めたために大切な用件が宙ぶらりになってしまう.

H. K. Do mullõ mẽ murghī harām

〔訳〕 二人のムッラーの手にかかってにわとりは不浄になる.

〔意〕 二人の論争のせいで仕事が全くはかどらぬこと.

〔原註〕 1ムスリムが使用する. 2ムスリムは屠殺に当たって動物の気管・食道・血管が同時に切断されるように刃物を用いる. もしこの三つが同時に切れず一つでも残った場合, その動物の肉はハラール, すなわち, 宗教上, 正浄なものと認められない. これは本来一人の人がするもので

ある．もし二人のムッラーが一緒ににわとりの首をはねるとすると一度に首をはねることができず不浄のものとなるだろう．

F. L.　Do mullā mẽ murghī ḥarām

〔訳〕 H. K. に同じ．

〔意〕 二人の権威が争って肝心な仕事がだめになること．

K. K.　なし．

P. A.　Do mullā̃ vicc murgī ḥarām

〔意〕 二人の欲張りの争いの対象になって目的が達せられないこと．

註1　語形上古いのは，H. K. の do mullõ mẽ ではなく，D. L. 及び F. L. の do mullā mẽ であろう．

註2　なお，"Urdū muhāvire aur kahāwatẽ —A. Rizvī" (Dillī) によれば 'Do mullā on mẽ murghī ḥarām'

(52)

D. L.　Dhīg dhīg ballū kā rāj

〔訳〕 バッルー（王）の国治めはめちゃくちゃ．

〔意〕 "Andherī nagarī caupaṭ rāj"（既出3）と同じ．役人や為政者の横暴についていう．

H. K.　Dhīgā dhīgī, ballū kā rājā

〔訳〕 ひどいもの　バッルー王は．

〔意〕 甚だしい無法についていう．

〔原註〕 Ballū はジャート族の王で，その国では「力が正義」という諺通りの治世が行われていた，ということである．

F. L., K. K., P. A.　なし．

註1　Dhīg とは，「粗野な，乱暴な，悪辣な」などの意を有する．dhīgā dhīgī は「乱暴，暴力」などの意．（H. S. S.）なお，F. L. では dhīg もしくは dhīgā は「①屈強な男②間男」の意，dhīgā dhīgī はなく，dhīgā dhāgī が「暴行，なぐりあい」の意．

註2　原文に即する限り D. L. では Ballū は国王もしくは国の名であり，H. K. では一応地域名も考えられるが，H. K. の〔原註〕では王の名となっている．

(53)

D. L.　Dhobī kā kuttā ghar kā na ghāṭ kā

〔訳〕 洗濯屋（ドービー）の犬は家のものでも洗濯場（ガート）のものでもない．

〔意〕 ①"Idhar na vihar yah balā kidhar" もしくは ②"be saro pā ādmī" ③"Illaẓī na ullazi" と同じ．

①何の役にも立たぬ者（F. L.）②困り果てている人（F. L.）③不明

H. K.　D. L. に同じ．

〔意〕 所属不明の人．

F. L.　Dhobī kā kuttā na ghar kā na ghāṭ kā

〔意〕 ①所属不明の人　②ぐうたら　③どっちつかずの

K. K.　Dhobī ke kutte ghar ke na ghāṭ ke (Shāhābād — 2, Camparan — 2, Paṭnā — 1)

〔意〕 どっちつかずでどちらのものでもなくなったこと．

〔原註〕 洗濯屋の犬は家でも洗濯場でも餌をもらえない．家にいるものは洗濯場のほうで餌をもらったものと思い，洗濯場にいるものは家で餌をもらったものと思う．

P. A.　Dhobī dā kuttā, nā ghar dā nā ghāṭ dā

〔意〕　なんの役にも立たぬようになった人についていう．

註1　これは‘Dhobī kā kuttā’とつづまってイディオムとしても用いられている．

註2　D. L.①は，F. L.では“Idhar kī na udhar kī yah balā kidhar kī”となっている．なお，これはH. K.には「災厄に見舞われた時に用いる．」と説明されている．

註3　D. L.②は，Plattsによれば「全く困窮している人」の意になる．

註4　K. K.の原註はこのような理解があるという意味で引用した．

(54)

D. L.　Nangī bhalī ki bil(?)mẽ bãs

〔訳〕　裸がよいか穴に竹がよいか(?)

〔意〕　ペルシア語で「御馳走すれば百の文句，しなけりゃ一つの文句（ですむ）」という諺に相当．すなわち，（なすべきことを）せずに恥かくよりもなすべきことをして恥かくがよい．

H. K.　Nangī bhalī ki chīkẽ pẽw

〔訳〕　裸にされるのと逆吊りされるのとどちらがよいか．

〔意〕　つらいもの二つのうちではつらさの少ないほうが選ばれるものだ．

F. L., K. K.　なし．

P. A.　Nangī bhalī ki bodlī

〔訳〕　裸がよいか愚かがよいか．

〔意〕　ひどく悪いものよりあまり悪くないもののほうがまし．

註1　D. L.の意味は次の原文による．

“wa mā‘idah cīdan ṣad ‘aib dārad wa na cīdan yak ‘aib”

註2　このペルシア語の諺の翻訳と考えてよいものが，H. K.及びF. L.に記載されている．H. K.では“Dastarkhān kə bichānə mẽ sau ‘aib, na bichānə mẽ ek ‘aib”

〔訳〕　食事を出せば百の文句，出さねば一つの文句．

〔意〕　何事もなすからには立派にしなければならない．

F. L.では“Dastarkhān bichānə mẽ sau ‘aib na bichānə mẽ ek ‘aib”

〔意〕　人に御馳走を出せば数え切れぬほどの難癖をつけられるが，出さなければ，難癖は「御馳走しなかった」という一つですむ．

註3　このようなH. K.とF. L.の意味の違いは，重点の置き所の差異によるものであるが，いずれも本来の意味からかなりへだたったものとなっている．

註4　H. L. K.にはH. K.と同じもののほか次の2異形が挙げられている．①nangī bhalā ki ṭəṭak macwā，②nangī bhalī kī mūsal āṛə 意味はH. K.と同じ．

(55)

D. L.　nāc na jānə ãgan ṭəṛhā

〔訳〕　踊りも知らずに「舞台がゆがんでいる」

〔意〕　能力もないのに見当はずれの文句をつけること．

『下手の物くさし』

H. K.　D. L.形のほか，次の2異形あり

①nāc na sakũ ãgan ṭəṛhā

②nācat ān bhəī na，āngan bākaṛə

Rādhnā bhəī na，olī lākaṛə

〔訳〕 ①D. L. に同じ.

②踊りもできずに「舞台がゆがんでいる」

料理も知らずに「たきぎがしめっている」

〔意〕 なにもできぬのに自分の弱点をかくそうと道具や手段に文句をつけること.

『名筆は筆を選ばず』

F. L. D. L. に同じ.

〔意〕 D. L. に同じ.

K. K. nāce ke lūr nā ãganwā ṭeṛh

〔訳〕 踊り方を知らずに「舞台がゆがんでいる」

〔意〕 欠陥を自分ではなく他に求めること.

P. A. nacc nā jāne vihṛe nũ dosh(nacc nā jāne vihṛā ḍi gā)

〔訳〕 踊りを知らずに庭を非難(庭が傾いている)

〔意〕 力量がないのに他者を非難すること.

(56)

D. L. Naukar lāḍ kapūr ke hõṭh malẽ haq lẽ

〔訳〕 ラードとカプールの召使共は(主人の)口をひねって給料取る.

〔意〕 使用人のする仕事がなく主人が情深いこと.

〔原註〕 シャージャハーン帝かアウランゼーブ帝の時代に Lāṛ と Kapūr という名の音楽家がいた. 二人の召使たちは少しも働かずに給金は取っていた. 騒動を起こされては困るという理由から支給されるのであった. これからこの諺ができた.

H. K. Naukar lāṭ kapūr ke hõṭh malẽ aur haq lẽ

〔訳〕 ラート。カプールの使用人は力ずくで給料取る.

〔意〕 あつかましいものもらいについていう.

F. L., K. K., P. A. なし.

註1 hõṭh malnā の意は「じょう舌なのや生意気なのをこらしめる」とあるが(F. L.), D. L. H. K. の脈絡からはこれは採りにくい. H. K. の「力ずくで」は原註のものである. D. L. の原註からは「口をひねる」と字義通りに訳したほうがよいようである.

註2 この諺は, 人物や地域, それに時代が特定のものを扱っているだけにすでに D. L. と H. K. とでも人名ばかりか意味上の差が見られる. それだけ伝達力に乏しいわけである.

(57)

D. L. Panj ʻaib sharʻī mādar pidar bezār

〔訳〕 (イスラム法の)「五悪」は親泣かせ.

〔意〕 品行の悪い人のこと.

H. K. Panj ʻaib sharʻī hai

〔訳〕 (イスラム法の)五悪あり.

〔意〕 (それには)五つの欠陥がある.

F. L. Ranj ʻaib sharʻī

〔意〕 ①窃盗 ②私通 ③飲酒 ④賭博 ⑤嘘言

K. K. なし.

P. A. Panc dosh asādh jā mahi tākī ketak'ās

〔訳〕 手の施しようのない五つの弱点を持った人にどれほど期待できようか.

〔意〕 五つの（治しようのない）弱点のある人は助かりようがない．

註1 「五悪」とはイスラム教でいう五つの悪徳で上のF. L.に数えたものである．'Panj 'aib shar'ī' には「不道徳な，不道徳な人」の意があり（platts），イディオムとして用いられている．

註2 H. K.及びF. L.の用法は諺として用いられているのではない．D. L.のみがわずかに諺としての用法に近いといえよう．ただし，H. K.では諺の中に数えられているのでここに掲げた．

註3 P. A.は表現上は他と全く異なっているが，この諺本来の用法を伝えているものと考えられる．

(58)

D. L. Paṛh patthar likh laharā bhae ĩtə̃ bādh kacahri gae

〔訳〕 不明．

〔意〕 どんなに努力しても学業が身につかぬこと．

H. K., F. L. なし

K. K. Likh loṛhā paṛh pathal solah dumī āṭh (Paṭnā — 1)

〔訳〕 「すり石（ローラー）（野菜をすりつぶすための）」と書いて「石（パタル）」と読む．1 6の2倍は8．

〔意〕 愚者が学問の話をしても無駄．無学もしくは愚かなバッターチャーリヤ（バラモン）を皮肉っていう．

P. A. Paṛh pukhtā tə likh lauhṛā

〔訳〕 うんと学んでわずか書く．

〔意〕 勉強を怠けようとする人の能力を評していう．

註1 H. M. K.によれば likh loṛhā paṛh patthar は，「全くの無学文盲の」の意．D. L.の paṛh patthar likh laharā は語順の相違，loṛhā と laharā の違いがあるがやはり熟語と考えるべきであろう．

註2 語義としてはP. A.が理解の範囲内に入るものである．なお，P. A.にはK. K.の後半と同じものを持つ異形と考えられるものがある．

Paṛhiā putt paṛhākū dā, tə solā̃ dūnī aṭṭh

〔訳〕 大学者の息子なのに1 6掛ける2は8．

〔意〕 なにも知らぬくせに知ったかぶりをすること．

(59)

D. L. Paṛhe na likhe nām muhammad fāẕil

〔訳〕 学問もせずに名はムハンマド・ファージル（大学者）．

〔意〕 自分の仕事では知られているが礼儀をわきまえぬ人についていう．

H. K. Paṛhā na likhā nām muhammad fāẕil (Paṛhā na likhā nām vidyādhar)

〔訳〕 D. L.に同じ．

〔意〕 愚か者のこと．

F. L. D. L.に同じ．

〔意〕 何も知らぬくせに知ったかぶりをすること．

K. K. Paṛhal likhal tərahe bāīs nām bideyāsāgar

〔訳〕 無学文盲なのに名は「学海」

〔意〕 実が名に伴っていないことを皮肉っていう．

P. A.　Paṛhiā nā likhiā nãũ muhammad fāzal

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　名が実に反すること.

註1　K. K. が本来の用法と思われるが, 他も相互に用法を異にしている.

註2　P. A. には異形に Muhammad fāzal の代りに Vidiā sāgar が用いられるものがある. このことは H. K. の場合と同じく諺の管理者の相違によるものである.

(60)

D. L.　Pãcõ ũgliyã ghī mẽ tar hai

〔訳〕　五本の指がギーの中.

〔意〕　大変順調なこと.

H. K.　Pãcõ ũgliyã ghī mẽ, chaṭhā sir kaṛhāī mẽ

〔訳〕　五本の指はギーの中, 六番目の首はなべの中.

〔意〕　大変順調な人のこと.

〔原註〕　前半のみがことわざとして用いられている.

F. L.　Pãcõ ũgliyã ghī mẽ hai

〔意〕　①大変調子のよいこと.　②大変豪奢なこと. ③飲食物がありあまっていること.

K. K.　なし.

P. A.　Panje ũglã ghiu vicc (panje hī ghiu vicc)

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　H. K. に同じ.

註1　'pãcõ ũglī ghī mẽ honā' の形で「しあわせに暮らす」の意のイディオムとして用いられている. (H. M. K.)

(61)

D. L.　Fajr kā bhūlā shām ko ghar āwe to use bhūlā nahī kahte

〔訳〕　朝まだき道を迷った人が夕方戻ってくれば迷ったといってはならぬ.

〔意〕　知らずして悪事を犯したもののそれを悔い改めるならば, その人を罪人ときめつけてはならぬ.

H. K.　Sabere kā bhūlā sājh ko bhī āwe to bhūlā nahī kahlātā

〔訳〕　朝まだき道を迷った者も夕方にでも戻ってくるならば迷える人とは呼ばれない.

〔意〕　自分の過ちを自らすぐに改めた人について用いる.

F. L.　Ṣubḥ ka bhūlā shām ko āe to use bhūlā nahī kahte

〔意〕　過ちをすぐ改めた人やなすべきことを間違った時にした人をとがめてはならぬ.

K. K.　なし.

P. A.　Saver dā bhuliā je sāmī(rātī)ghar ājāwe tā bhulā nahī

〔訳〕　朝方迷った人が夕方(夜)戻ってくれば, 迷ったとはいわぬ.

〔意〕　道を迷いながらもすぐ正しい道に戻った人についていう.

(62)

D. L.　Baglā māre pankh hāth

〔訳〕　青さぎを殺して得るのは羽.

〔意〕　徒労についていう. (P. 6) なんの得にもならぬことをすること (P. 145)

『骨折り損のくたびれもうけ』

H. K.　D. L. に同じ.

〔意〕　他に害を及ぼしながらなんの利益もないこと.

F. L.　Baglā mārə pankh

〔意〕　D. L. に同じ.

K. K.　Baghlā mārle pā̃khi hāth (Campāran — 1)

〔意〕　下らぬことをすれば得られるものも下らぬものである.

P. A.　なし.

註1　D. L. と F. L. とは同じ意味であるが, これらと H. K. とは後者が「他に害を及ぼしながら」の意味合いを持っている点で異なる.

註2　また, K. K. は他の三者とも意味合いを異にしている.

(63)

D. L.　Bachṛā khū̃ṭə kə bal kūdə

〔訳〕　仔牛は杭を頼りにとびはねる.

〔意〕　弱い者は後援者の力を借りて威張るもの.

『虎の威を借るきつね』

H. K.　Bachṛā khū̃ṭī hī kə bal kūdtā hai

〔意〕　身分の低い者は身分の高い人の威を借りて威張るもの.

F. L.　H. K. に同じ.

〔意〕　人はだれしも自分の後援者を自慢するもの.

K. K.　① Khūtā kə bal par bāchā kūdlə (Campāran — 2)

② Khuṭṭāk balə parlū cukarai (Muzaffarpur — 2)

〔訳〕　① D. L. に同じ.

②水牛の仔は杭がしっかりしていればこそなくもの（とんだりはねたりするもの）.

〔意〕　他に支えられているものがはねまわれるのは支えがしっかりしていればこそ.

P. A.　なし.

註1　意味は相互に少しずつ異なっている.

(64)

D. L.　Baṛə bal kā sar nīcā

〔訳〕　大げさなことを言う者は恥をかく.

〔意〕　自慢したり得意になったりしていれば後悔することになる.

H. K.　Baṛə bal kā sir nīcā

〔意〕　D. L. に同じ.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕　自惚れ者は恥をかく.

K. K., P. A.　なし.

(65)

D. L.　Baṛə miyā̃ so baṛə miyā̃ choṭə miyā̃ subḥān allāh

〔訳〕　大旦那は大旦那（で大したものだが, ）若旦那も（なかなかのもの）.

〔意〕　AがBと仲違いし, Cと親しくなったのでCがBとの友情のことで悩むこと.

〔原註〕　今日これはある人よりもその人の息子に余計に悩まされる場合に用いられる.

H. K.　Baṛə to thə hī choṭə subḥān ʻallāh

〔意〕 これは悪い意味にのみ用いられる．さる男なかなかのしたたか者であったが，もう一人はそれ以上の曲者．親父をしのぐ息子とか兄以上の弟，などといった場合に用いられる．

F. L.　D. L. に同じ．

〔意〕 大きいほうはしたたか者に違いなかったが，小さいほうはそれ以上のしたたか者だったというわけ．

K. K.　Bare miyā ta bare miyā choṭe miyā subhān allā(Paṭnā — 1, Sāran — 1, Shāhābād)

〔訳〕 大人（たいじん）は大人（たいじん）でそのようなものだが，小人（しょうじん）もそれに負けず劣らず．

〔意〕 偉い人（賢者）が並みの人（愚者）と同じような間違いをした場合に皮肉っていう．

P. A.　なし．

註1　K. K. のみ用法が異なる．

註2　Subḥān allāh は，感動詞で「猛烈，凄い，参った，ああ神様」などの意を表わす．

(66)

D. L.　Barsegā barsāwegā damṛī sar lagāwegā

〔訳〕 雨が降る．雨を降らせる．1セールが1ダムリーの値になる．

〔意〕 雨の降り出す時に子供たちが大声でこれを歌う．

H. K.　Barsegā, barsāwegā, paise sar lagāwegā

〔訳〕 雨がが降る．雨を降らせる．1セールが1パイサーの値になる．

〔原註〕 雨季に子供たちがこれを歌う．

F. L., K. K., P. A. なし．

註1　damṛī はパイサー (Paisā) の四分の一もしくは八分の一．1セールは約930グラム．

註2　H. L. K. にはやはり H. K. 形と同じものが挙げられており，「雨季に適当な雨が降れば穀物の値が下がる」との註がある．

註3　これは古くからの童歌の一節であろう．歌詞は少し異なるが，Muḥammad Shaikh ud-dīn nayyar は童謡詩 'Bādal āye, Bādal āye' の中で次のように歌っている．('Bacco kā khilaunā', naī dilli, 5th ed. 1970, P. 31)

āye āye bādal āye
lāye lāye bārish lāye
barsenge barsāege ye
kauṛī khet lagāege ye
kauṛī kauṛī ret me jāye
pānī pānī khet me jāye

(67)

D. L.　Bal be jummā terī dhaj

〔訳〕 ジュムマーよ，お前の身なりには参った参った．

〔意〕 懐中には一タカーも持たぬくせに金満家と張り合うとは見栄の張りようも大したものよ．

H. K.　D. L. に同じ．

〔訳〕 同上．

〔意〕 お前の頭の良さ（もしくは，身なり）には全く敬服．（皮肉な意に用いる）

F. L., K. K., P. A.　なし．

註1　Jummā は固有名詞と考えてよいだろう．

(68)

D. L.　Bāp na mārə pidaṛī bəṭā tīr andāz

〔訳〕 親父がのびたきを射たぬのに息子は弓術家（とは）.

〔意〕 (27)と同じ.（力量もないのに大それたことをする）

H. K.　Bāp na mārī pīdaṛī bəṭā tīrandāz

〔訳〕 親父がのびたきを射ったこともないのに息子が弓術家（とは）.

〔意〕 大きな口をきく人.

F. L.　Bāp na mārī pidaṛī bəṭā tīrandāz

〔意〕 ①親父は小心者だったのに息子が大胆なことをしたり，②小心者の子が自慢したりするのを皮肉っていう.

K. K.　Bāp mārə gīdaṛī bəṭā tīrandāz(Paṭnā − 3)

〔訳〕 親父はジャッカルを追っていたのに息子が弓術家（とは）.

〔意〕 家柄や伝統からはみ出たことをするのを皮肉っていう.

P. A.　Piu nā mārī piddaṛī tə puttar tīr andāz

〔訳〕 D. L. に同じ

〔意〕 普通の人のくせに大きな口をきくこと.

註1　K. K. は前半の部分が他と趣きを異にしているかに見えるが，構造上は Bāp と bəṭā が対比されているし，pidaṛī に対する gīdaṛī の意味も「つまらぬもの」という点では共通している．したがって，F. L. も参考にしてここでは意味は D. L. も H. K. も本来は K. K. と同趣のものであったと考えてよかろう.

註2　H. K. 及び F. L. の mārī を文法的に説明するには bāp に付くべき動作格辞 nə が省略されていると考えねばならない．もっとも na を nə と読めば，「親父がのびたきを射ち，息子が弓術家」となる.

(69)

D. L.　Bārah bāṭ aṭhārah paĩḍə phirā hai

〔訳〕 十二本の道，十八本の細道を歩きまわったことがある.

〔意〕 熟達していること.

H. K.　Bārah bāṭ aṭhārah naĩṛə

〔訳〕 十二本の道，十八本の細道，どの道へ進めばよいのやら.

〔意〕 問題が甚だ複雑なこと.

F. L., K. K., P. A.　なし.

註1　Bārah bāṭ には字義としての「十二本の道」のほかに次のような意味がある.「散り散りの；ばらばらの；様々の；荒れ果てた.」

註2　D. L. 及び H. K. の用法だけでは形態上も意味上もこれ以上の検討は控えるべきであろうが，H. K. は後になにか省略されていると考えたほうがよかろう.

(70)

D. L.　Bāsī rahə na kuttā khāə

〔訳〕 食べ残しが出ても犬も食わず.

〔意〕 内には食べものは余るほどある.

H. K.　Bāsī bacə na kuttā khāy

〔訳〕 D. L. に同じ.

〔意〕 ①貧窮についていう．②節倹を重んじる人についても用いる．

F. L. Bāsī bace na kuttā khāe

〔意〕 食べ残さぬように．また，いたんで捨てないでよいように．収入と支出がぴったり．甚だ貧しいことを述べるのに用いる．

K. K. Bāsī bace na kuttā khāye (Campāran — 1, Muzaffarpur — 2)

〔訳〕 食べ残しや犬に食べさせるものが残らぬように全く無駄のないように料理をこしらえること．

〔意〕 計算づくめでなにかをした場合にいう．

P. A. なし．

註1 D. L. は他のものと意味を全く異にしている．他は共通の意味を有している．

(71)

D. L. Būr ke laḍḍū《khaēga so pactāegā aur na khāegā so pactāegā》

〔訳〕 おがくずまんじゅう《食べれば悔み，食べねば悔む》

〔意〕 説明なし．

〔原註〕 シャージャハーン・アーバードである男がおがくずでまんじゅうをこしらえ，それを売る時に，次のような声をかけた．「食べれば悔み，食べねば悔む」 一部の人は'Būr'をふすまの意に解している．

H. K. Būr ke laḍḍū khāy so pachtāy, na khāy woh bhī pachtāy = khāy to pachtāy, na khāy to pachtāy

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 中身はよくないのにみなが欲しがるもの．

〔原註〕 あるいかさま師が黒砂糖の汁におがくずを混じてまんじゅうをこしらえ，「これは，デリーの団子だ」と言って売り出した．めずらしかったので瞬く間に売り切れてしまい，もうけたその男は家に帰ってしまった．遅れて買いに来た人は買えなかったのを残念がり，買った人たちはだまされたのでくやしがった．

F. L. Būr ke laḍḍū khāe to pactāe aur na khāe to pactāe

〔意〕 すれば悔み，しなければしたくなるもの．

K. K. なし．

P. A. Būr de laḍḍū khāwe tā̃ pachtāwe, nā khāwe tā̃ pachtāwe

〔訳〕 D. L. に同じ．

〔意〕 自慢や空威張り——食べることも吐きすてることもできぬもの．

註1 D. L.〔訳〕の《 》内は〔原註〕を参考にして註者が補ったもの．

註2 laḍḍū とは豆粉等に砂糖，ギー．木の実などを混じてこしらえた団子状の菓子のことである．まんじゅうとは意訳したものである．Būr には「もみがらなどの穀類のから，おがくず，くず」などの意がある．platts によれば，'Būr kā laḍḍū' には「もみがらでこしらえたまんじゅう（ラッドゥー）」すなわち，「人を惑わしたりだましたりする者」「見かけはきれいで内側はきたないもの」「見込みがよくて結果の悪いもの」「見かけだおしの人」などの意がある．

註3 K. L. sahal は次のように説明している．

Būr kā laḍḍū とはギーを用いず小麦粉に砂糖だけを入れてこしらえたものをいう．おいしくないので食べた者は悔み，食べなかったものはおいしいのを食べ逃したと思って悔む．時にはもみがらも混ぜられるのでこの諺がある．

"Būr kā lādū k āy so bī pistāwai, na khāy so bī pistāwai"(R. K., P. 176)
これが一番適切な意味であろう.

註4　この諺はBūr ke laḍḍū と後半とに分かれたまま用いられることが多い. 前半はイディオムとして用いられる.

註5　P. A. の用法は甚だ特殊化している.

(72)

D. L.　Bhus mẽ cingī ḍāl jamā lo dūr khaṛī

〔訳〕 わらに火を放ち信じこませて高みの見物.

〔意〕 中傷しそそのかして仲違いをさせ自分は高みの見物をする人を評していう.

H. K.　D. L. に同じ.

〔意〕 仲違いさせたり中傷したりする人を評していう.

〔原註〕 女性が多く用いる.

F. L.　Bhus mẽ cingārī (cingī) ḍāl jamā lo dūr khaṛī

〔意〕 D. L. に同じ.

K. K., P. A.　なし.

註1　khaṛī と女性形になっていることからも女性の管理してきた諺らしいことが判る.

(73)

D. L.　Man bhāye muṇḍiyā hilāye

〔訳〕 気に入ったが「いや」と頭を振る.

〔意〕 心にもなく断ること.

『いやとかぶりを縦に振る』

H. K.　Man bhāwe mũḍ hilāwe　これはMan cāhe muṛiyā hilāwe に同じ.

〔意〕 心にもなく断ること. 女の「いや」は「うん」のこと.

F. L.　Man bhāe(cāhe)muṇḍiyā hilāe

〔意〕 D. L. に同じ.

K. K.　Man bhāwe mūṛe hilāwe (Campāran — 2)

〔訳〕 気に入ったので頭を振る.

〔意〕 気に入ったればこそ頭をたてに振る.

P. A.　なし.

註1　日本の諺『いやとかぶりを縦に振る』が女性の心理を述べているのと同様この諺もH. K. の〔意〕に書かれている通りやはり微妙な女性心理を表わしていることがわかる. ただし, 女性にのみ限定されているのでもないようである.

註2　K. K. のみ他と用法を全く異にしている. なお, 「頭を振る」—— muṇḍiyā / mũḍ / mūṛe / hilānā —— には, 肯定と否定の両方の意味がある.

(74)

D. L.　Munh lagāī ḍomnī gāwe tāl batāl

〔訳〕 ドームニーはつけあがると調子はずれの歌を歌う.

〔意〕 金持に近づきを得れば馬鹿げたことを言ってもたしなめられぬ.

H. K.　Muh lagāī ḍomnī gāwe tāl betāl

〔意〕 あまりつけあがらせてはならぬ.

F. L.　①H. K. に同じ. ②Munh lagāī ḍomnī āī bacco samet

〔訳〕 ①D. L. に同じ. ②ドームニーがつけあがって子供たちまでつれてきた.
〔意〕 少しやさしくされればなれなれしくなること.
K. K. なし.
P. A. Mũh lāī ḍũmṇī gāwai tāl bitāl
〔訳〕 D. L. に同じ.
〔意〕 賤しいものにやさしくしてつけあがられること.
註1 ḍomnī は清掃業などに従事する最下層カーストの ḍom の女であるが, 音楽。舞曲を生業とすることもある.
註2 D. L. の tāl batāl は正しくは tāl bətāl .
(75)
D. L. Munh sə to phūṭo
〔訳〕 声を出して言え. 返事をせよ.
〔意〕 うんとかすんとかいえ. なんとか言え. (返事をせよ.)
H. K. Mũh sə bolo sir sə khəlo
〔訳〕 声を出せ, 頭を振れ.
〔意〕 D. L. と同じ.
〔原註〕 神がのりうつると人はかなりの時間, 頭を振りながら「ふーん ふーん」というものである. これから 'Sir sə khəlnā' (頭で遊ぶ) というイディオムができた. その意味は頭を振って返事をすることである.
F. L. H. K. に同じ.
〔意〕 D. L. に同じ.
K. K., P. A. なし.
註1 これはイディオムに数えるべきものであるが, H. K. のように後半に付加された形で諺扱いされている例があるので参考までに掲げた. ただし, F. L. ではイディオム扱い.
註2 Munh sə phūṭnā も Munh sə bolnā も F. L. ではイディオムとして数えられている.
(76)
D. L. Yah mũh aur masūr kī dāl
〔訳〕 この口にれんず豆の汁 (ダール) とは.
〔意〕 これはお前には無理だ. 能力以上の事をしようとすること.
H. K. D. L. に同じ. 下記のものと同じ.
" Yah mũh aur gājarẽ "
〔訳〕 この口ににんじんとは.
〔意〕 能力以上に得ようとすること. 柄にもない願い.
〔原註〕 にんじんは安価なものであるが, ここでは風刺的に用いられている.
F. L. D. L. に同じ.
〔意〕 D. L. に同じ.
K. K. Yahī mũh masūr kə dāl (Shāhābād — 2)
〔訳〕 D. L. に同じ.
〔意〕 無能な人とかその器でない人が不相応なものを願うのを風刺していう.
P. A. Ēh mũh tə masrā dī dāl
〔訳〕 D. L. に同じ.

〔意〕 自分の経済力以上のことを望むこと.

註1 H. L. K. にはD. L. 形が高望みの意に用いられている. 同時に, "Yah mũh aur rājarẽ" も挙げているがH. K. とは異なり「にんじんなどあなた(金持ち)の召上がるものではない」の意に用いられている.

註2 しかし, Q. A. はこの両形と"Yah mũh aur dhaniyə kī caṭnī"の三形を同義として説明している.

(77)

D. L. Rānī ko rānā pyārā kānī ko kānā pyārā

〔訳〕 ラーニー(王妃)にはラーナー(王)が, カーニー(片目の女)にはカーナー(片目の男)がいとしい.

〔意〕 だれしもわが子は一層可愛いもの.

『親の欲目』

H. K. D. L. に同じ.

〔意〕 ①どんなものであれ自分のものは大切なもの. ②似た者同志気の合うものだ.

『似るを友』

F. L. D. L. に同じ.

〔意〕 人は自分に似た者を好くものだ.

K. K. Kānī kə kānā piyār rānī kə rānā piyār (Shāhābād — 2)

〔訳〕 ラーニー(王妃)にはラーナー(王)がいとしいならば, カーニー(片目の女)にはカーナー(片目の夫)こそいとしいもの.

〔意〕 F. L. に同じ.

P. A. Rāṇī nũ rāu piārā, kāuṇī nũ kāo piārā

〔訳〕 王妃には王子が, 牝烏には烏(の子)がいとおしいもの.

〔意〕 だれにとっても自分の身内はよいもの.

註1 D. L. の〔意〕はH. K. の①に含まれるものであるが, D. L. が他にすべて共通してみられる意味を記載していないのが注目される. ただし, P. A. (その直訳)はD. L. の意味に用いられても不自然ではないことを示している.

註2 K. K. においてはD. L. 系のものに対し, 語句の転位が見られる. (K. K.) ko = kə (D. L.)

(78)

D. L. Lakṛī kə bal bandarī nāce

〔訳〕 (牝)猿は木(棒)の力を借りて踊るもの(暴れるもの)

〔意〕 (63)に同じ.

H. K. D. L. に同じ.

〔訳〕 (牝)猿は木(棒)の(威)力で踊るもの.

〔意〕 脅さぬことには話にならぬ.

F. L., K. K., P. A. なし.

註1 D. L. とH. K. との差はkə balの解しかたによるものであるがH. K. のように猿回しの立場から解するほうが妥当であり, 意味として本来的なものであろう. D. L. は恐らく表現法の類似, kə balの使用により(63)と同じ解訳になるのであろう.

(79)

D. L.　Lahū lagā　kə shahīdo̰ mə̰ mil gayā

〔訳〕　血をぬりつけて殉教者の仲間入りした.

〔意〕　能力も全くなかったのに偉人の猿真似をしただけのこと.

H. K.　Lahū lagā shahīdo̰ mə̰ milə

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　名誉ばかり追うこと.

F. L.　Lahū lagā kar shahīdo̰ mə̰ milnā (dākhil honā)

〔意〕　ほんの僅かの働きで大仕事をした人たちの仲間入りをすること. ほんの少し仲間入りして名を売ること.

K. K., P. A.　なし.

註1　D. L. の意味は H. K. 及び F. L. の意味と全く異る. 後者では自分の手は汚さず名のみ追うことを皮肉っているのである.

註2　F. L. ではイディオム扱いになっているので動詞は不定詞形である.

(80)

D. L.　Shaikh kyā jānə ṣābun kā bhāo

〔訳〕　長老が石けんの値段を知っているものか.

〔意〕　あの人にこれの値打や取柄がわかるはずがない.

H. K.　D. L. に同じ.

〔意〕　関わりのないことを知っているはずがない.

F. L., K. K., P. A.　なし.

註1　F. L. にこれと同じ表現法の次のような諺が見られる.

Bardar kyā jānə adrak kā swād

〔訳〕　猿にしょうがの味がわかるものか.

〔意〕　無能な者にはものの真価はわからない.

これは D. L. の意味にかなり通じる性質のものであるが, D. L. もやはり H. K. の意味に解するのが最も自然であろう. シャイクは「無能者」としてよりも「関わりのない人」の意に解するのが適切であるからである.

(81)

D. L.　Sab milə̰ par langotiyā na milə

〔訳〕　だれに出会ってもよいが竹馬の友には出会いたくないもの.

〔意〕　なにもかも知っている旧友には用心しなければならぬ.

註1　H. K., F. L., K. K., P. A. いずれにもこれに通じる諺は見られない.

(82)

D. L.　Siyānā kauwā gū khātā hai

〔訳〕　利口な烏が糞を喰う.

〔意〕　詐欺師は慾にかられて危難に陥るもの.

H. K.　Sayānā kauwā khə khāy

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　利口者と自負している人があからさまに間違いをおこした時に用いる.

F. L.　D. L. に同じ.

〔意〕　あまりにも気の利いた人はだまされる.

K. K.　なし.

P. A.　Siāṇā kā̃ ga dagī te digdā hai

〔訳〕　利口な烏が汚物にはまる.

〔意〕　利口な人が大変な間違いをした際に用いる.

註1　D. L. と F. L. とは通じ合うものだが, H. K. は趣きを異にしている.

註2　H. K. の Khe の意味は原註による.

(83)

D. L.　Sau sunār kī na ek lohār kī

〔訳〕　金細工師の百打も鉄鍛冶の一打にしかず.

〔意〕　百の悪事もたわむれもおれのお返し一発にはかなわない.

H. k.　なし.

F. L.　Sau sunār kī ek lohār kī

〔訳〕　金細工師の百打は鉄鍛冶の一打.

〔意〕　弱い者の百打も強い者の一打にはかなわない.

Sau sonarwā ke ta ek loharwāke (Paṭnā — 1)

K. K.　Sau sonār ke se ek lohār ke (Camparan — 1)

Sau coṭ sonārī ek coṭ lohārī (Munger — 1, Campāran, Sāran — 1)

Sai coṭ sonār ke nu ek coṭ lohār ke (Shāhābād — 2)

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　弱い者の百打に強い者の一打が匹敵する.

P. A.　Sau suniār dī, ik luhār (ṭhaṭhiār)dī

〔訳〕　金細工師の百(打)は鉄鍛冶(真鍮細工師)の一(打)

〔意〕　力のない者が繰り返しやっても出来ぬことを力の強い者が一度にやってしまった際に用いる.

註1　D. L. と F. L. とでは同じことをいうのであるが, 前者はこれを使用する人称(一人称)が限られているので, 特定の用法となる.

註2　H. L. K. には, "Sau coṭ sunār kī, ek coṭ luhār kī" の形で見られ, "Khuṭ khuṭ sunār kī" の異形も挙げられている. 用法は, 「嫌味や皮肉の意を表わす」とされている.

(84)

D. L.　Ḥātim kī gor par lāt mārtā hai

〔訳〕　ハーティム王の墓を足蹴にする(ハーティム王を凌ぐ).

〔意〕　貧しいのに気前のよいこと.

H. K.　Ḥātim kī gor par lāt mārī

〔訳〕　ハーティム王の墓を足蹴にした.

〔意〕　ハーティム王以上の施しをした. 吝嗇家を揶ゆしていう.

F. L.　Ḥātim kī gor (qabr) par lāt mārnā

〔訳〕　D. L. に同じ.

〔意〕　①ハーティム王をしのぐほど気前よく施すこと.

②吝嗇家が突然気前のよいことをするのを皮肉って言う.

K. K., P. A.　なし.

註1　D. L. は他と趣きを全く異にする. 貧しいのと吝嗇なのとが同じことをするのであるが

意味は異なる.

(85)

D. L. Himāyat kī gadhī ʻirāqī ko lāt māre

〔訳〕 後ろだてを得た(牝)ろばが(イラク種の)駿馬を蹴飛ばす.

〔意〕 力のない者が金持とか有力者に操られて自分より上の人に横柄な態度をとること.

H. K. Himāyati kī ghoṛī ʻirāqī ko lāt māre

〔訳〕 後ろだてを得た(牝)馬が(イラク産の)駿馬を蹴飛ばす.

〔意〕 ①有力者の後援につけあがり自分より上の人や有力者に喧嘩をしかけること.

②高官の使用人たちが人を人と思わず, 立派な人を侮辱したりすること.

F. L. Himāyatī kī ghoṛī ʻiraqī ke lāt martī hai

〔意〕 後援者がいればくだらぬ奴でも目上の人に立ち向かうものである.

K. K., P. A. なし.

註1 いずれも「茶坊主(根性)」を批評したものである.

〔補 記〕

1 諺の配列はD. L.においては順不同であるが, 小論では便宜上, デーヴァナーガリーの文字表にならった.

2 限られた資料と筆者の非力のために今後考察すべき点が多数残る結果となった. 歴史的及び地理的に多くの用例を集め検討を加えることが課題である.

1976年12月 (了)